

茨城県教育財団文化財調査報告第385集

# 取手宿跡 1

都市計画道路上新町環状線（東工区）街路  
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成26年3月

茨城県竜ヶ崎工事事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第385集

# と り 取 手 宿 跡 1 で し よ く あ と

都市計画道路上新町環状線（東工区）街路  
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成26年3月

茨城県竜ヶ崎工事事務所  
公益財団法人茨城県教育財団



## 序

茨城県では、県内全域の発展とその調和をはかるため、また県土の均衡ある発展を支える基盤として、円滑で安全な道路網の整備を推進しているところです。

その一環として、茨城県竜ヶ崎工事事務所は、JR 常磐線取手駅を中心とする市街地交通の円滑化を図るため、都市計画道路上新町環状線街路整備事業を計画しました。

しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である取手宿跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県竜ヶ崎工事事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成24年4月から6月までの3か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、取手宿跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県竜ヶ崎工事事務所から多大な御協力を賜りましたことに對し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、取手市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成26年3月

公益財團法人茨城県教育財團

理事長 鈴木欣一



## 例　　言

- 1 本書は、茨城県竜ヶ崎工事事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財團が平成 24 年度に発掘調査を実施した。茨城県取手市東 2 丁目甲 886 – 3 番地ほかに所在する取手宿跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
　　調査 平成 24 年 4 月 2 日～ 6 月 30 日  
　　整理 平成 25 年 10 月 1 日～ 12 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長樋村宣行のもと、以下の者が担当した。  
　　首席調査員兼班長 稲田 義弘  
　　調　　査　　員　　近江屋成陽  
　　調　　査　　員　　大久保隆史
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、次席調査員木村光輝が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、千葉県我孫子市における遺跡分布について千葉県我孫子市教育委員会生涯学習部文化・スポーツ課より御指導いただいた。

## 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = - 12,200 m, Y = + 21,120 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …、西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j、西から東へ 1, 2, 3, … o と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 P - ピット PG - ピット群 SA - 碓石列 SB - 碓石建物跡 SD - 溝跡 SK - 土坑

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 T - 瓦

土層 K - 扰乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。



煤

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 ■ 瓦

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は〔 〕を、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 碓石建物跡の主軸は、平行方向を通る軸線とし、その主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたもののは以下のとおりである。

変更 SB 2 → SB 2 · 第 8 号 碓石 · PG 1 SB 3 → SA 1 · 第 7 号 碓石

SB4 → SB 4 · 第 9 · 10 号 碓石 · PG 2 SB 5 → 第 11 号 碓石 · PG 1

欠番 SB 3 SB 5 SK14 SD 2

# 目 次

序

例 言

凡 例

目 次

概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 江戸時代の遺構と遺物	11
(1) 確石建物跡	11
(2) 土坑	14
(3) 溝跡	21
(4) 整地層	22
2 その他の遺構と遺物	27
(1) 確石建物跡	27
(2) 確石列等	28
(3) 土坑	29
(4) ピット群	33
(5) 遺構外出土遺物	35
第4節 まとめ	39
写真図版	PL 1 ~ PL 6
抄 錄	



# とりでしゅくあと 取手宿跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

取手宿跡は、取手市の南東部に位置し、西から東へ流れる利根川左岸の標高6~8mの河岸段丘上に立地しています。都市計画道路上新町環状線（東工区）街路整備事業とともに、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財團が平成24年度に発掘調査を行いました。



## 調査の内容

今回は470m<sup>2</sup>を調査しました。調査の結果、江戸時代の礎石建物跡2棟、土坑6基、溝跡1条、整地層2か所などを確認しました。主な出土遺物は、土師質土器（手焙）や瓦質土器（植木鉢）、陶器（碗、土瓶）、磁器（碗、皿）、鉄製品（鍋、和鉢）、銅製品（鏡、蓋、漏斗）、錢貨（寛永通寶、文久永寶）などです。これらの遺構や遺物から、江戸時代の取手宿の様子が分かりました。



調査A区全景（東側から）



かいどう  
街道沿いにあった礎石建物跡



ぎへん し つ  
瓦片が敷き詰められた礎石建物跡の据付穴



かまく  
火災があった様子を伝える土坑



み と とくり さつ かびん こうろ  
神酒德利や仏花瓶、香炉など

## 調査の結果

取手宿は、江戸時代、水戸と江戸を繋ぐ水戸街道に沿ってつくられた宿場町です。調査区域のすぐ南側を東西に走る道路は、当時の水戸街道です。

礎石建物跡2棟は、19世紀後半、この街道沿いに立地していました。1棟は、瓦片を敷き詰めた上に礎石を置き、もう1棟は、利根川の河原石を礎石にして、かねてから家屋を建てていたことが分かりました。土坑からは、神前に供える神酒德利、仏花瓶や香炉などの仏具が見つかりました。また、別の土坑からは、宿場町を襲った火災により焼け出た廃材や壊れた日用雑器が見つかりました。磁器の碗や皿が、当時の人々の生活の中で使われていたことが分かりました。

調査区域は19世紀に入り、整備され、幾度かの火災を経て、宿場町が拡張されていったことが分かりました。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県竜ヶ崎工事事務所は、取手市において交通の円滑化を図るために都市計画道路上新町環状線（東工区）街路整備事業を進めている。

平成21年5月27日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、都市計画道路上新町環状線（東工区）街路整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成21年10月16日に現地踏査を、平成22年10月7・12・21日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成23年3月30日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、事業地内に取手宿跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成24年2月9日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成24年2月15日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成24年2月20日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、都市計画道路上新町環状線（東工区）街路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成24年2月24日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、取手宿跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、公益財團法人茨城県教育財團を紹介した。

公益財團法人茨城県教育財團は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成24年4月2日から6月30日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

取手宿跡の調査は、平成24年4月2日から6月30日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	4月	5月	6月
調査準備 表土除去 遺構確認				
遺構調査				
遺物洗浄 注写 整理				
撤取				

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

取手宿跡は、茨城県取手市東2丁目甲886-3他に所在している。

取手市は、茨城県最南部に位置し、利根川を挟んで千葉県と隣接している。市の南部は利根川に沿った低地、北部は小貝川に沿った低地が広がっている。また、それらの低地に挟まれて東西に細長く北相馬台地が続いている。標高は21~25mで、小貝川、常陸川、鬼怒川、利根川の支流が樹枝状に入り込み、変化に富んだ地形を形成している。市街地より東側では、小文間の小台地や隣接する利根町の小台地が独立した台地として連なっている。市の地形形成に深く関与した常陸川や鬼怒川は、江戸時代の「利根川東遷」と呼ばれる大規模な河川改修工事により、群馬県水上町大水上山を水源とする関東平野を貫流する利根川と名をかえて、市の南部を西から東へ流れ、千葉県との県境を形成している。小貝川は栃木県那須町八代付近を水源とし、蛇行しながら市の東部で利根川と合流している。

北相馬台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤層となり、下部から成田層下層、成田層上層、竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層の順で堆積している。堆積状況は、水平で単調であり、褶曲や断層は見られない<sup>1)</sup>。

取手宿跡は取手市の南東部に位置し、江戸時代の流路の東遷以降、市の南部を流れる利根川によって土砂が堆積し、種々の微地形を発達させた、利根川右岸の標高6~8mの河岸段丘上に立地している。

今回の調査区は、取手宿跡の東端部にあたる。調査前の現況は宅地である。

### 第2節 歴史的環境

取手宿跡が所在する取手市は、大小の河川、低地、台地と変化に富んだ自然環境の中で昔から人々が生活を営み、数多くの遺跡が残っている。特に、小貝川、常陸川や鬼怒川、江戸時代の大規模な河川改修工事により市の南部を流れる利根川などの水系によって形成された台地上には、旧石器時代から江戸時代までの遺跡が多数所在している。取手の地名が歴史上にあらわれたのは、戦国時代が終わり江戸時代に入ってからである。その時期の取手に関わる歴史的環境を記すことにする。

天正18年(1590)、後北条氏滅亡により、豊臣氏の指示のもと、関東へ入国したのは徳川家康であった。徳川氏は領内統治と財政的基盤の確立を優先し、江戸の開発を進めた。また江戸を起点とする主要街道・河川の要所を押さえる家臣団の知行割を行った。このころ、在地士家である染屋正康と家臣12騎によって、河川改修により湿地帯となった大鹿村地先の利根川沿いの開発が進められた。染屋正康とは後年、取手宿本陣(2)と名主を兼ねた染野家の祖先である<sup>2)</sup>。

取手市域も新たな領主による支配が開始され、兵農分離や検地などが行われた。豊臣氏が後北条氏を平定した天正18年ころから文禄年間(1592~96)の検地を経て成立した近世の取手市域の村々には、推定であるが市之代、高井、米ノ井、桑原、井野、青柳、小文間などがあった<sup>3)</sup>。寛永年間(1624~43)の年貢割付状に「大鹿取出村」と記載されており、取手は大鹿村と一村を形成し、佐倉と守谷を結んでいた通称、佐倉道の利根川付きの一農村であった。寛文6年(1666)、利根川の大洪水によって、取手の町並みは大きな被害を受け

た。寛文8年に町割を行い、従来の利根川へ向かう道筋に沿った町並みから、利根川に沿った町並みへと計画的に道が付け替えられた。延宝2年（1674）に大鹿村と取手村が分村し、水戸街道が取手を通るようになるのは、天和年間（1681～84）から貞享年間（1684～88）にかけてである。それ以前の水戸街道は、取手を通らず、我孫子宿から布川・布施間の布川渡しにて利根川を渡河し、藤代宿を経由して水戸へ向かっていた。

天和2年（1682）、取手村は宿駅として設定され、貞享4年（1687）、染野家が水戸徳川家の本陣に指定された。元禄11年（1698）、宿場機能の整備のため大鹿村の住民は、取手宿の町並みに連続する水戸街道沿いに移転して新町を形成した。長澤寺も合わせて移転し、現在地に建立された<sup>4)</sup>。

取手宿の町並みは取手・大鹿の二か村が連続したもので、その範囲は水戸街道に沿って東西1kmほどである。西から東にかけて、新町・上町・仲町・片町とあり、仲町と片町の間から南に向かって取手元宿が存在した。また問屋場の経費や往還役も両村で勤めていた。機能的にも景観的にも、取手宿は取手・大鹿両村で形成されるようになった。明治初年まで続く取手宿は、この時に名実ともに成立したといえる。そして、江戸時代後期、取手宿は、宿場町としてだけでなく、長澤寺や新四国相馬靈場など庶民の信仰の場として人が集まり、この地域の文化的中心として発展がみられた<sup>5)</sup>。

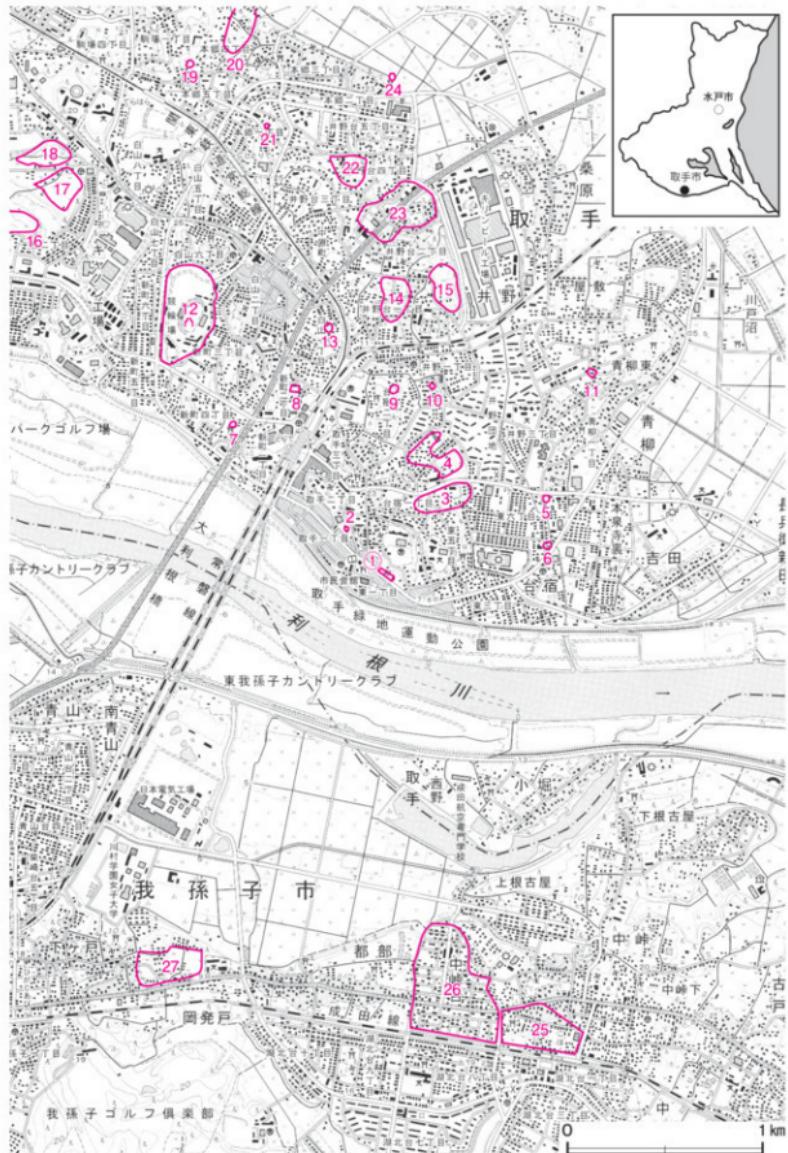
明治時代初頭、戊辰戦争により、国内各地の宿・助郷間は、大きな人馬負担を受けた。その結果、明治5年、宿駅制度は廃止された。取手・大鹿両村で形成された取手宿は、明治時代前期の行政区画の変遷にめまぐしく変った。明治2年（1869）に葛飾県、明治4年（1871）に印旛県、明治6年（1873）に千葉県、明治8年（1875）茨城県と移り変わり、現在に至っている。明治時代中期、取手町と名前を変えた。鉄道網が発達し、人や物の流通手段が変化するまで、水戸街道上の水運と陸運の重要な交点として存続した<sup>6)</sup>。

## 註

- 1) 茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査 龍ヶ崎』茨城県 1987年12月
- 2) a 取手市史編さん委員会『取手市史 通史編Ⅰ』取手市教育委員会 1991年3月  
b 取手市史編さん委員会『取手市史 通史編Ⅱ』取手市教育委員会 1992年3月  
c 取手市史編さん委員会『取手市史 近世資料編Ⅰ』取手市役所 1982年3月
- 3) 註2 a 文献と同じ。
- 4) 註2 a 文献と同じ。
- 5) 佐久間好雄『図説 榊敷・北相馬の歴史 茨城県の歴史シリーズ』郷土出版社 2006年2月
- 6) a 取手市史編さん委員会『取手市史 民家編』取手市役所 1980年10月  
b 取手市史編さん委員会『取手市史 通史編Ⅲ』取手市教育委員会 1996年3月

## 参考文献

- ・駒澤悦郎「大山I遺跡2 取手都市計画事業下高井特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」茨城県教育財团文化財調査報告 第185集 2002年3月
- ・茨城県教育文化課編『茨城県遺跡地図 地図編』茨城県教育委員会 2001年3月
- ・茨城県教育文化課『茨城県遺跡地図 地名表編』茨城県教育委員会 2001年3月
- ・今井隆助『北下郷地方史』善書房 1974年12月
- ・守谷町史編さん委員会『守谷町史』守谷町 1985年3月
- ・我孫子市史編集委員会原始・古代・中世部会『我孫子市史 原始・古代・中世編』我孫子市教育委員会 2005年3月
- ・宮内良隆・泉水正和『大鹿城跡発掘調査報告書』取手市教育委員会 1996年3月



第1図 取手宿跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「取手」）

表1 取手宿跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	取手宿跡						○	15	花輪台遺跡						○
2	取手宿本陣						○	16	稲向原遺跡Ⅲ	○					
3	台宿二本松遺跡	○	○	○	○			17	稲向原遺跡Ⅰ	○					
4	台宿貝塚遺跡	○			○			18	稲向原遺跡Ⅱ			○			
5	長町遺跡			○	○			19	西浦遺跡Ⅱ				○		
6	高畑遺跡				○			20	西浦遺跡Ⅰ	○		○			
7	山王台遺跡			○				21	寺田大塚遺跡				○		
8	取手一里塚				○			22	除戸遺跡	○	○				
9	寺前遺跡	○						23	北中原遺跡	○	○	○			
10	本留作左衛門重次墳墓						○	24	寺田耕地遺跡	○					
11	観音免遺跡				○			25	神明前遺跡				○		
12	大鹿城跡	○				○		26	鹿島前遺跡				○		
13	中原遺跡				○			27	中屋敷遺跡				○		
14	南中原遺跡				○	○									



第2図 取手宿跡調査区設定図（取手市都市計画図2,500分の1より作成）

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

取手宿跡は、取手市の南東部に所在し、利根川右岸の標高6～8mの河岸段丘上に立地している。今回調査した本跡は、取手宿の東端部に位置する。調査面積は470m<sup>2</sup>で、調査前の現況は宅地である。

調査の結果、江戸時代の礎石建物跡2棟、土坑6基、溝跡1条、整地層2か所、時期不明の礎石建物跡1棟、礎石列1列、礎石11か所、土坑17基、ピット群2か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に43箱出土している。主な遺物は、土師質土器(焼烙)、瓦質土器(植木鉢)、陶器(碗、皿)、磁器(碗、皿)、土製品(窓鶴)、石器(砥石)、鉄製品(鍋)、銅製品(蓋)、錢貨、瓦などである。

### 第2節 基本層序

調査区西部の低地上の平坦面(A1c7区)にテストピットを設定し、基本土層(第3図)の堆積状況の観察を行った。テストピットの観察結果は、以下のとおりである。

第1層は、碎石層である。層厚は12cmである。

第2層は、灰褐色を呈する現代の整地層である。黄褐色砂粒を多く含み、粘性は弱く、層厚は24cmである。

第3層は、黄褐色を呈する現代の整地層である。粘性・締まりは弱く、層厚は5cmである。

第4層は、灰黄褐色を呈する現代の整地層である。黄褐色砂粒を多く含み、粘性は弱く、層厚は5cmである。

第5層は、黄褐色を呈する現代の整地層である。粘性は弱く、層厚は16cmである。

第6層は、橙色を呈する現代の整地層である。粘性は弱く、層厚は12cmである。

第7層は、黒褐色を呈する現代の焼土層である。炭化物を多く含み、粘性は弱く、層厚は3cmである。

第8層は、黄褐色を呈する現代の整地層である。黄褐色砂粒を多く含み、粘性は弱く、層厚は10cmである。

第9層は、灰黄褐色を呈する江戸時代の整地層である。締まりは強く、層厚は4cmである。

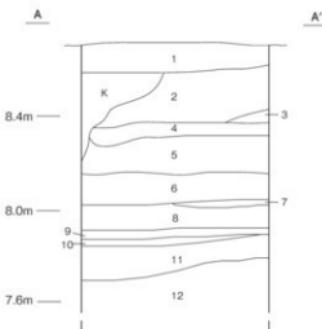
第10層は、黄褐色を呈する江戸時代の整地層である。

黄褐色砂粒を多く含み、粘性は弱く、層厚は2cmである。

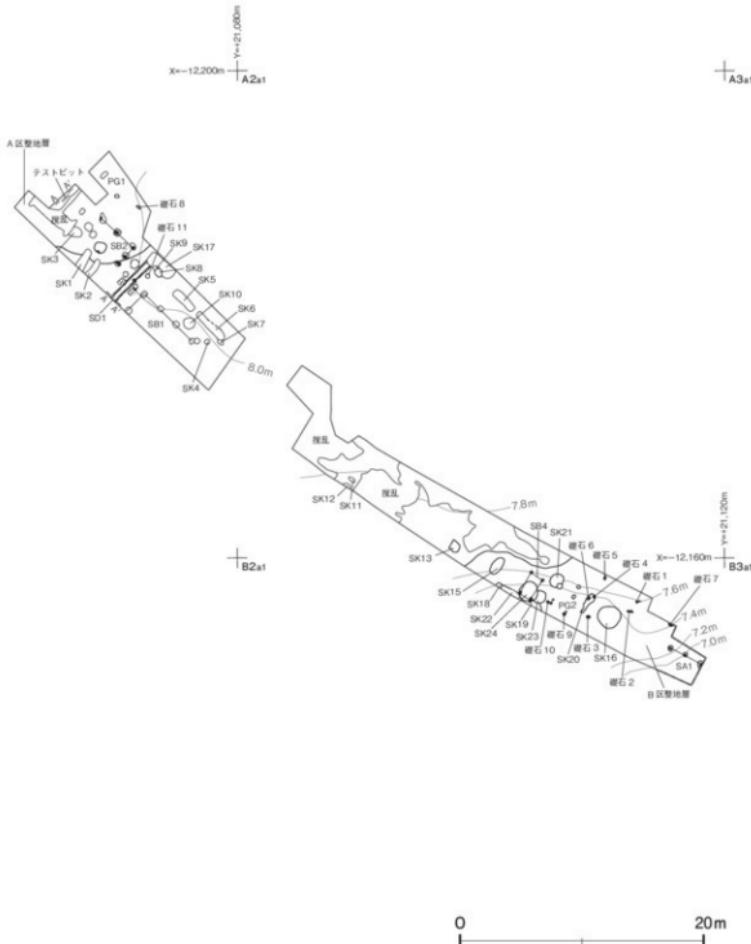
第11層は、橙色を呈する江戸時代の整地層である。締まりは強く、層厚は12cmである。

第12層は、黄褐色を呈する竜ヶ崎砂疊層である。黄褐色砂粒を多く含み、粘性は弱く、下層は未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構は第9層上面で確認できた。



第3図 基本土層図



第4図 取手宿跡遺構全体図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、礎石建物跡2棟、土坑6基、溝跡1条、整地層2か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### (1) 磯石建物跡

###### 第1号礎石建物跡（第5・6図）

位置 調査A区東部のA 1e8～A 1f0区、標高8mほどの河岸段丘面上に位置している。

重複関係 本跡の礎石据付穴は、第1号ピット群P 4を掘り込んでいる。

規模と構造 南西半部が調査区域外へ延びているため、桁行は3間で、梁行は1間しか確認できなかった。桁行方向はN=43°～Wである。確認できた規模は、桁行5.4m、梁行1.8mである。柱間寸法は、桁行・梁行ともに1.8m(6尺)の等間隔に配置され、柱筋は揃っている。

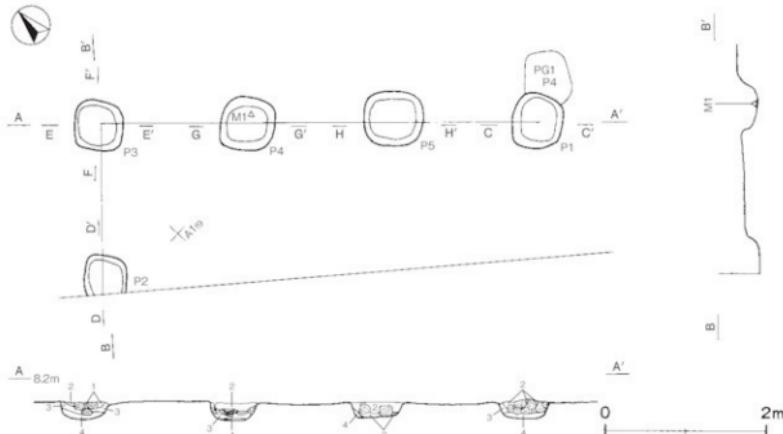
礎石据付穴 5か所。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、長軸54～76cm、短軸48～69cmである。深さ16～24cmで、掘方の断面は逆台形である。第1・2層は礎石撤去後の堆積土層で、第3・4層には根石にあたる縛や瓦片が充填されている。

###### 土層解説

1 黒褐色 黄褐色砂粒多量、炭化物少量  
2 黑褐色 黄褐色砂粒中量、炭化物少量

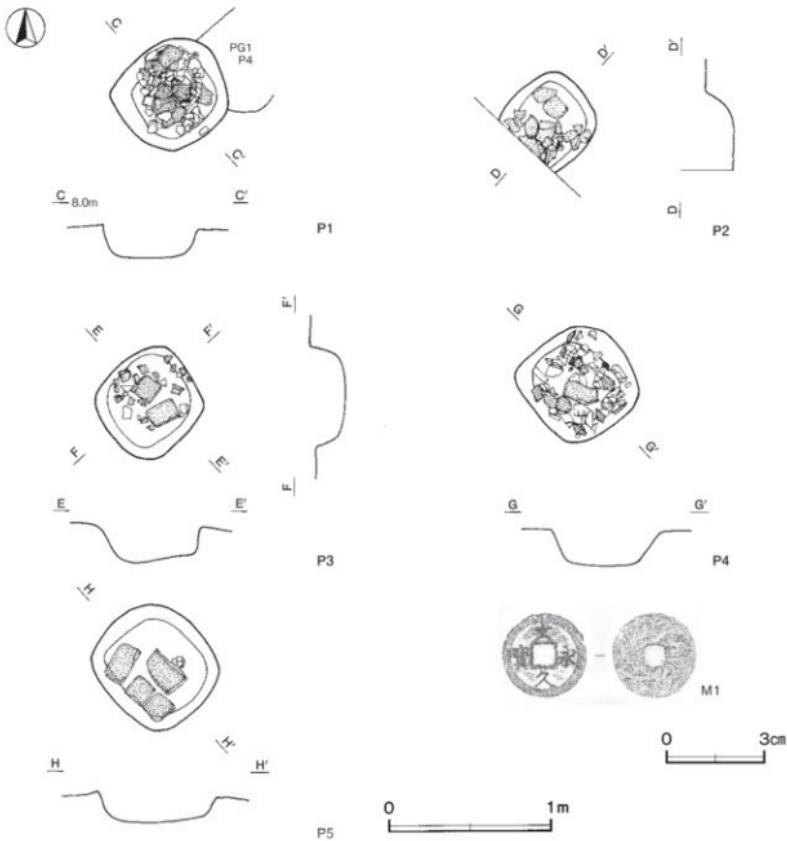
3 黒褐色 黄褐色砂粒多量、炭化粒子少量  
4 黑褐色 黄褐色砂粒中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 陶器片2点(碗、不明)、磁器片4点(染付碗1、壺1、不明2)、礎18点、金属製品3点(釘2、不明鉄製品1)、銭貨2点(文久永寶)、瓦片210点(棟瓦)が据付穴から出土している。陶器や磁器は細片のため、図示できなかった。M1はP 4の底面から出土している。



第5図 第1号礎石建物跡実測図

**所見** 磯石据付穴の縁や瓦片は、磯石据付のための根石と考えられる。磯石は確認できず、建物の廃絶時に取り除かれたと思われる。磯石据付穴の様相から町屋などの建物と想定でき、P 4 の底面から出土している銭貨（文久永寶）は地鎮に用いられたと考えられる。時期は、出土遺物から 19 世紀後半に比定できる。



第6図 第1号磯石建物跡・出土遺物実測図

第1号磯石建物跡出土遺物観察表（第6図）

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 1	文久永寶	26	0.6	0.7	2.6	銅	1863年	真文連字手	P 4 底面	PL 6

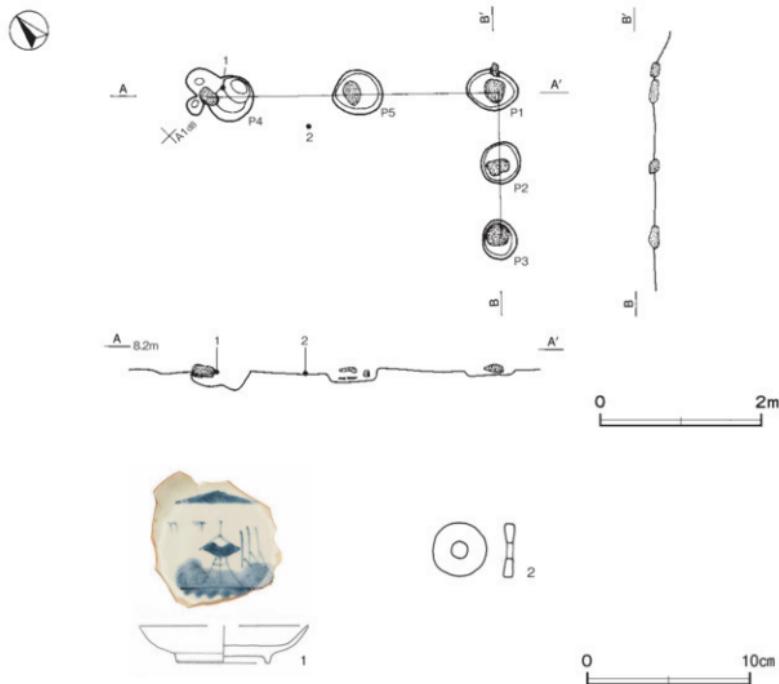
### 第2号礎石建物跡（第7図）

位置 調査A区西部のA 1 d8区、標高8mほどの河岸段丘面上に位置している。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の建物跡である。調査区域南西部で礎石または据付穴は確認できなかった。桁行方向はN-45°-Wである。確認できた規模は、桁行3.6m、梁行1.8mである。柱間寸法は、桁行が北妻から18m(6尺)の等間隔に配置され、柱筋は揃っている。北梁行は0.9m(3尺)の等間隔に配置され、柱筋は揃っている。

礎石据付穴 5か所（礎石5か所）。平面形は円形または椭円形で、長径50～88cm、短径44～58cmである。深さ8～24cmで、掘方の断面は逆台形である。礎石の平面形は不整長方形または不整椭円形で、長軸(径)26～30cm、短軸(径)16～25cm、厚さ10～14cmである。

遺物出土状況 陶器片1点(土瓶)、磁器片6点(染付碗5、小皿1)、瓦片1点(不明)が据付穴から出土している。遺構確認面の出土遺物で本跡に帰属すると思われるものは、土師質土器片1点(鉢)、陶器片13点(碗5、鉢2、皿1、土瓶4、蓋1)、磁器片1点(戸車)、錢貨1点(不明)、瓦片5点である。1はP4埋土上層、2は確認面からそれぞれ出土している。



第7図 第2号礎石建物跡・出土遺物実測図

**所見** 時期は、本跡が19世紀前葉に比定できる整地層上面に立地することと、出土遺物から19世紀後半に比定できる。桁行の柱間寸法が1間（6尺）であることから北西方方向へ延びる可能性があることと、梁行1.8m（6尺=1間）であることから南西方向へ延びる可能性がある。

第2号礎石建物跡出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	厚さ	孔径	胎土・釉薬	色調	縫付・特徴ほか	産地	出土位置	備考
1	磁器	小皿	[10.4]	2.3	[5.6]	緻密 透明釉	灰白	染付 山水文	瀬戸美濃	P4埋土上層	30%
番号	種別	器種	口径	厚さ	孔径	胎土・釉薬	色調	縫付・特徴ほか	産地	出土位置	備考
2	磁器	戸車	3.3	0.6	1.0	緻密 透明釉	灰白	使用痕あり	瀬戸美濃	確認困難	100%

表2 江戸時代礎石建物跡一覧表

番号	位 置	桁行方向	柱間数	規 模	面 積 (m <sup>2</sup> )	柱間寸法			礎 石 縫 付 穴		主な出土遺物	時 期	備 考 重複関係 (古→新)	
						幅×奥(間)	桁 × 奥(m)	柱間(m)	縫付(m)	裏柱数	側柱数	深さ(cm)		
1	A1e9～ A1b9	N-43°～W	3×1	5.4×1.8	9.7	1.8	1.8	0	5	隅丸方形	16～24	錢貨、瓦片	19世紀後半	
2	A1d9	N-45°～W	2×2	3.6×1.8	6.5	1.8	0.9	5	5	隅丸長方形	8～24	陶器、磁器	19世紀後半	A1区整地層 →本跡

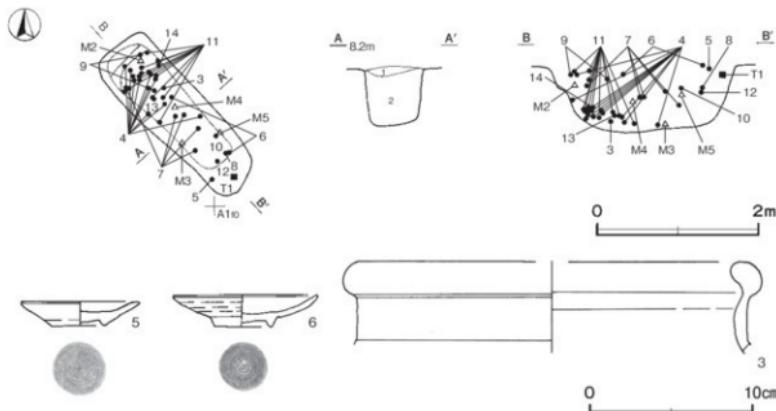
## (2) 土坑

今回の調査で江戸時代の土坑6基を確認した。そのうち、特徴的な4基については文章で記述する。他の2基については、実測図と一覧表を掲載する。

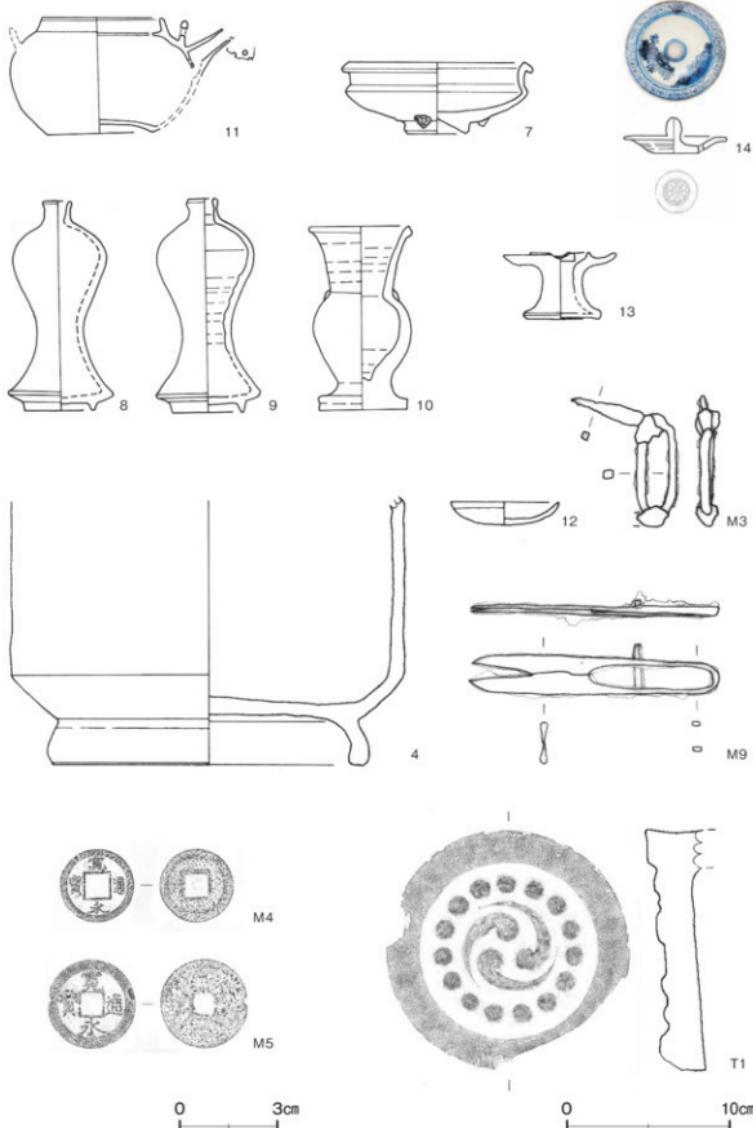
### 第5号土坑（第8・9図）

**位置** 調査A区東部のA 1e9 区、標高8mほどの河岸段丘面上に位置している。

**規模と形状** 長軸2.34m、短軸0.74mの隅丸長方形で、長軸方向はN-43°～Wである。深さは82cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。



第8図 第5号土坑・出土遺物実測図



第9図 第5号土坑出土遺物実測図

**覆土** 2層に分層できる。焼土ブロックや炭化物が含まれる堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

1 黒褐色 炭化物・焼土粒子・黄褐色砂粒中量

2 黒褐色 炭化物中量、焼土ブロック・黄褐色砂粒少量

**遺物出土状況** 土師質土器片5点(手培2、鉢2、不明1)、陶器片17点(小皿7、鉢1、神酒利2、仏花瓶1、急須蓋1、灯明皿2、灯明受皿3)、磁器片12点(小碗3、五寸皿1、染付皿4、香炉1、土瓶1、土瓶蓋2)、石器1点(砥石)、金属製品31点(和銘1、屏金具1、火打金1、釘23、不明5)、錢貨5点(寛永通寶3、文久永寶1、不明1)、瓦片5点(軒丸瓦1、棟瓦4)、礫27点が覆土上層から下層にかけて出土している。一括で廃棄されたものと考えられる。

**所見** 時期は、出土遺物から19世紀後半に比定できる。覆土中に焼土や炭化物が含まれ、火を受けている遺物が多いことから、火災後の廃棄処理のための土坑と考えられる。

第5号土坑跡出土遺物観察表(第8・9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
3	土師質土器	手培	[24.0]	(5.6)	—	長石・黒色粒子	棕	普通	ロクロナデ	覆土上層	10%
4	土師質土器	手培	—	(16.5)	19.3	長石・黒色粒子	棕	普通	ロクロナデ	覆土上・下層	50% PL 5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	給付・特徴ほか	産地	出土位置	備考
5	陶器	小皿	7.3	15	3.3	長石・長石軸	浅黃	ロクロナデ	在地	覆土上層	100%
6	陶器	小皿	8.7	20	3.6	長石・長石軸	灰白	ロクロナデ 高台付 見込環状痕	在地	覆土上層	80%
7	磁器	香炉	10.7	34	[36]	緻密 青磁輪	灰白 棕	三足形	肥前	覆土上層	50% PL 4
8	陶器	津透利	18	12.9	4.3	緻密 線輪	灰白	瓶子形 輪高台	肥前	覆土中層	90% PL 4
9	陶器	津透利	16.3	13.2	4.4	緻密 線輪	灰白	瓶子形 輮高台	肥前	覆土上層	90% PL 4
10	陶器	伝花瓶	6.4	11.3	5.4	長石・铁輪・灰輪	灰白	ロクロナデ 耳貼付	廻戸美濃	覆土上層	80% PL 4
11	磁器	土瓶	7.3	7.2	6.4	緻密 透明輪	灰白	口縁墨文 山水文	肥前	覆土下層	70%
12	陶器	灯明皿	6.7	14	—	長石・茶軸	灰白	丸底 見込環状痕	廻戸美濃	覆土中層	100%
13	陶器	灯明受皿	3.7	4.1	4.4	長石・石英・灰軸	灰白	容器付 油滴半月形	信楽	覆土下層	60% PL 5
14	磁器	土瓶蓋	6.3	2.2	2.8	緻密 透明輪	灰白	つまみ付0.9 染付 落し蓋 有孔	肥前	覆土中層	100%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 2	和銘	15.3	2.5	0.7	(51.8)	鉄	振り部一部欠損	覆土中層	PL 6
M 3	屏金具	8.0	2.6	1.5	35.6	鉄	環状部分・扉打ち込み部分残存	覆土下層	

番号	鉄種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鋤年	特徴	出土位置	備考
M 4	寛永通寶	2.3	0.7	1.2	26	鋼	1636年	無背鉄	覆土中層	PL 6
M 5	寛永通寶	2.8	0.6	1.5	46	鋼	1697年	無背鉄	覆土中層	PL 6

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	胎土	地成	特徴	出土位置	備考
T 1	軒丸瓦	(41)	15.0	14.8	(700.5)	長石	良好	左巻き三巴 進珠15	覆土上層	PL 5

第17号土坑(第10図)

**位置** 調査A区中央部のA-1 d9区、標高8mほどの河岸段丘面上に位置している。

**重複関係** 第1号溝跡に掘り込まれ、第8・9号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸250m、短軸1.16mの隅丸長方形で、長軸方向はN-45°-Wである。深さは21cmで、底面は凹凸している。壁は外傾して立ち上がっている。

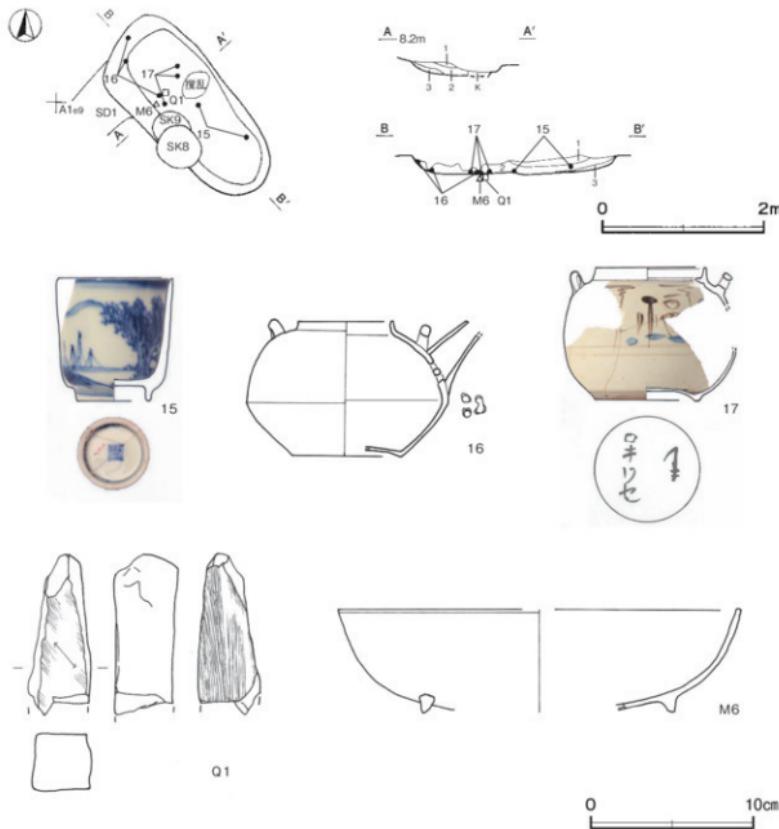
**覆土** 3層に分層できる。焼土ブロックや炭化物が含まれる堆積状況から、埋め戻されている。

**土層解説**

- |         |                      |         |               |
|---------|----------------------|---------|---------------|
| 1 にい黄褐色 | 黄褐色砂粒多量、焼土粒子・灰化粒子微量  | 3 にい黄褐色 | 黄褐色砂粒多量、炭化物少量 |
| 2 黒 色   | 炭化物・黄褐色砂粒中量、焼土ブロック少量 |         |               |

**遺物出土状況** 土師質土器片15点（鉢11、焙烙3、ミニチュア1）、陶器片7点（徳利1、土瓶2、不明4）、磁器片8点（小碗1、碗2、染付碗1、染付皿3、急須1）、土製品2点（羽口、竈鏃）、石器5点（砥石）、金属製品12点（鉄鍋1、釘6、不明5）、瓦片16点（平瓦15、丸瓦1）、礫9点が出土している。15～17・Q1・M6は覆土下層から出土している。

**所見** 時期は、出土遺物から19世紀後半に比定できる。覆土中に焼土や炭化物が含まれ、火を受けている遺物が多いことから、火災後の廃棄処理のための土坑と考えられる。



第10図 第17号土坑・出土遺物実測図

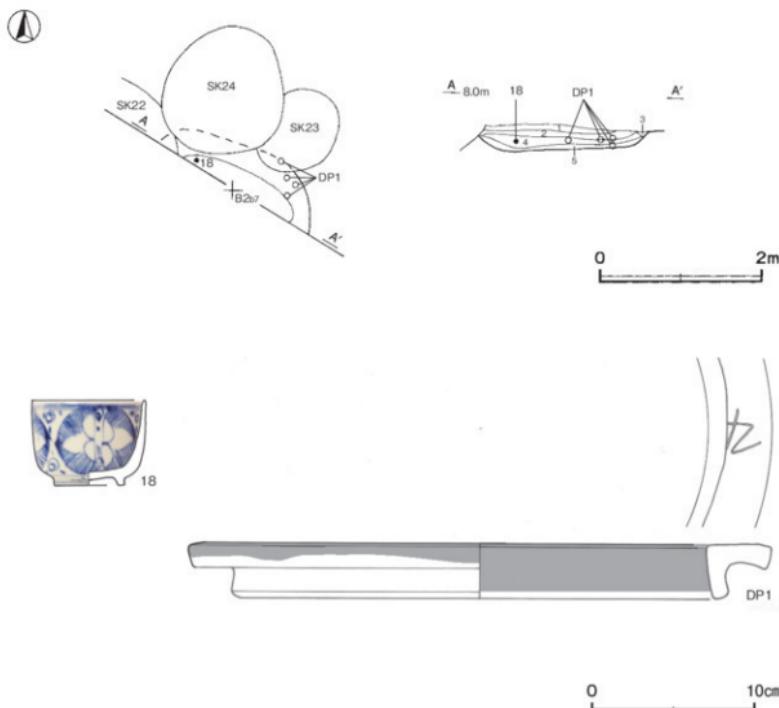
第17号土坑出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	給付・特徴ほか	産地	出土位置	備考
15	磁器	小瓶	[72]	7.6	4.6	緻密 透明釉	灰白	染付 山水文 底部に「メロミ」。	瀬戸美濃	覆土下層	50%
16	陶器	土瓶	58	8.4	[67]	長石 緑釉	灰青	ロクロナゲ		大原相馬	覆土下層 50% PL 4
17	陶器	土瓶	66	8.2	6.4	長石・黒色粒子 長い黄粉	に赤い黄粉 染付 よろけ繪文 文字「福」底部 に墨書「ホワセ」	蓋子	蓋子	覆土下層	40%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質		特徴		出土位置	備考
Q 1	砥石	(9.9)	(3.9)	4.1	(206.9)	瑪瑙岩	砥頭1面 他は被削面			覆土下層	PL 5
番号	器種	口径	器高	底径	重量	材質		特徴		出土位置	備考
M 6	網	[24.8]	(6.3)	—	(145.9)	鉄	鋸造 体部下端に足付			覆土下層	

第19号土坑（第11図）

位置 調査B区中央部のB-2a7区、標高8mほどの河岸段丘面上に位置している。

重複関係 第22・23・24号土坑に掘り込まれている。



第11図 第19号土坑・出土遺物実測図

**規模と形状** 南西半部が調査区域外に延びているため、北西・南東径は2.20mで、北東・南西径は0.58mしか確認できなかった。平面形は梢円形と推定できる。深さは32cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がりしている。

**覆土** 5層に分層できる。焼土ブロックや炭化物が含まれる堆積状況から、埋め戻されている。

#### 土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック中量、炭化物少量	4 にぶい黄褐色	黄褐色砂粒多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
2 にぶい黄褐色	焼土ブロック・黄褐色砂粒中量、炭化物少量	5 にぶい黄褐色	黄褐色砂粒多量、炭化粒子微量
3 にぶい黄褐色	黄褐色砂粒多量		

**遺物出土状況** 土師質土器片3点（鉢、焰烙、不明土器片）、陶器片19点（小碗1、擂鉢1、不明17）、磁器片24点（小碗3、染付碗2、不明19）、土製品2点（竈鶴）、金属製品6点（不明鉄製品5、不明銅製品1）、錢貨1点（寛永通寶）、瓦片19点、ガラス片1点、自然遺物5点（貝4、炭1）が出土している。DP 1は覆土中層から下層にかけて、18は覆土中層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土遺物から19世紀中葉に比定できる。覆土の堆積状況や破損した遺物、自然遺物が投棄されていることから、生活雑器等の廃棄処理のための土坑と考えられる。

第19号土坑跡出土遺物観察表（第11図）

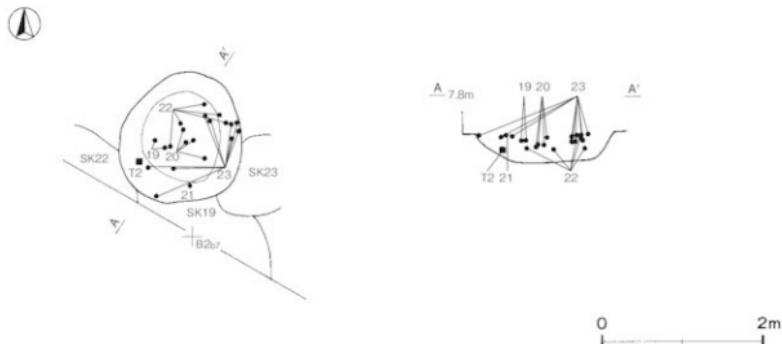
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	粘付・特徴ほか	産地	出土位置	備考
18	磁器	小碗	69	52	42	緻密 透明釉	灰白	型紙 緑内二重綻 草花文	肥前	覆土中層	60%
<hr/>											
DP 1	磁器	[360] [284]	34	(688.3)	長石・石英	焼付着 上面「九」とヘラ書			肥前	DP 1	

第24号土坑（第12・13図）

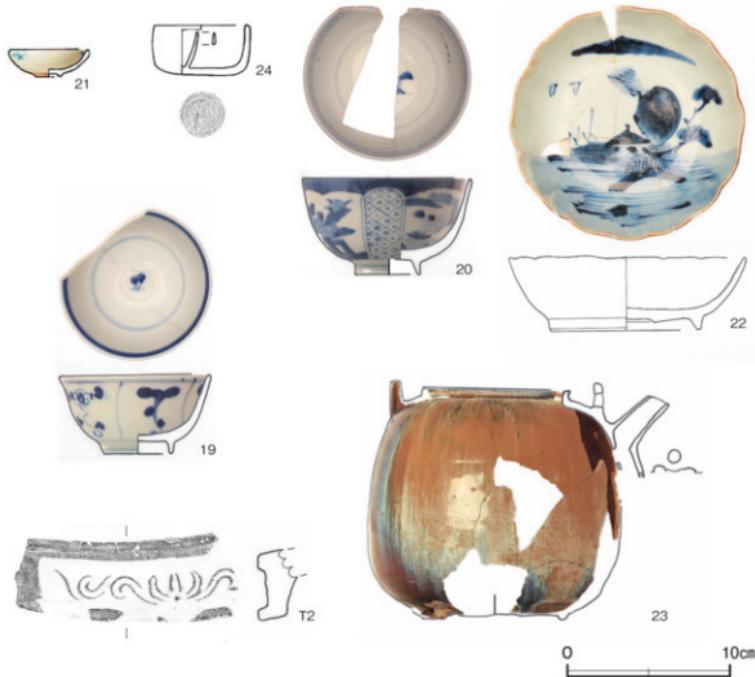
**位置** 調査B区中央部のB 2a6区、標高8mほどの河岸段丘面上に位置している。

**重複関係** 第19・22・23号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.66m、短径1.52mの円形である。深さは32cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がりしている。



第12図 第24号土坑実測図



第13図 第24号土坑出土遺物実測図

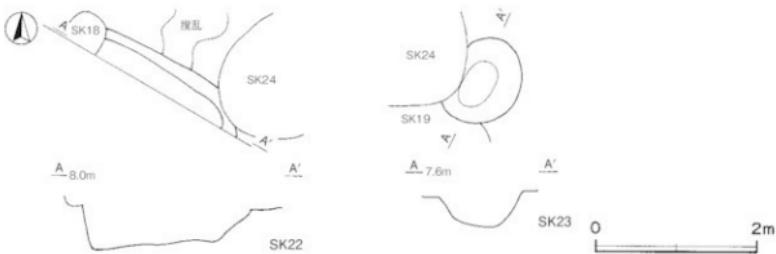
遺物出土状況 陶器片10点(碗2、大瓶1、土瓶6、秉燭1)、磁器片24点(小碗3、中碗2、染付碗17、紅猪口1、小鉢1)、土製品1点(羽口)、石器2点(剥片)、金属製品1点(釘)、瓦片16点(軒瓦1、平瓦1、瓦14)、自然遺物6点(貝)が出土している。19~21・23は覆土上層、22・T2は覆土中層からそれぞれ出土した。

所見 時期は、出土遺物及び第19号土坑を掘り込んでいることから、それ以降の19世紀中葉に比定できる。第19号土坑と同じ、生活雑器等の処理施設と想定できる。

第24号土坑出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	絞付・特徴ほか	産地	出土位置	備考
19	磁器	小碗	90	46	40	緻密 透明釉	灰白	染付 緑内二重綵 見込二重綵に花 卉文 立溝茎花卉文	肥前	覆土上層	70%
20	磁器	中碗	105	60	[40]	緻密 透明釉	灰白	型紙 緑内露文 山水文	肥前	覆土上層	60%
21	磁器	紅猪口	50	17	16	緻密 透明釉	灰白	ロクロナデ 章花文	肥前	覆土上層	100%
22	磁器	小鉢	14.5	45	90	緻密 透明釉	灰白	染付 山水文 型打 輪花(16)	肥前	覆土中層	90%
23	陶器	土瓶	88	14.7	90	長石 灰釉	浅黄橙	呉須輪流し	瀬戸美濃	覆土上層	50%
24	陶器	秉燭	58	31	30	長石 鉄釉	赤灰	たんこ形	不明	覆土中	100% PL 4

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	胎土	焼成	特徴	出土位置	備考
T 2	軒丸	(26)	(145)	(52)	(1598)	長石・石英・黒色粒子	良好	唐草文	覆土中層	PL 5



第14図 第22・23号土坑実測図

表3 江戸時代土坑一覧表

番号	位置	長辺方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長辺×短辺(m)	深さ(cm)					
5	A 1e9	N - 43° - W	隅丸長方形	234 × 074	82	平坦	外傾	人為	陶器、磁器、鐵製品、銭貨	
17	A 1d9	N - 45° - W	隅丸長方形	250 × 116	21	凹凸	外傾	人為	土師質土器、陶器、磁器	SD1 → 本跡 → SK8・9
19	B 2a7	-	〔格円形〕	220 × (0.58)	32	平坦	外傾	人為	陶器、磁器、銭貨	本跡 → SK22・23・24
22	B 2a6	N - 60° - W	〔隅丸長方形〕	(186) × 044	60	平坦	傾斜	人為	陶器、石器	SD1 → 本跡 → SK18・24
23	B 2a7	N - 27° - E	〔格円形〕	106 × (0.70)	40	平坦	傾斜	人為	土師質土器、陶器、磁器	SK19 → 本跡 → SK24
24	B 2a6	-	円形	166 × 152	32	平坦	外傾	人為	陶器、磁器、土製品、瓦片	SK19・22・23 → 本跡

### (3) 溝跡

溝跡1条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。平面図については、遺構全体図に掲載する。

#### 第1号溝跡（第15図）

位置 調査A区中央部のA 1e8～A 1e9区、標高8mほどの河岸段丘面上に位置している。

重複関係 第17号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西端部が調査区域外へ延び、北東端部が第17号土坑に掘り込まれているため、確認した長さは443mである。A 1e8区から北東方向(N - 44° - E)へは直線に延びている。規模は上幅0.40～0.68m、下幅0.30～0.48m、深さ18cmである。断面は逆台形で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。炭化物や焼土粒子が含まれる堆積状況から、埋め戻されている。

#### 土層解説

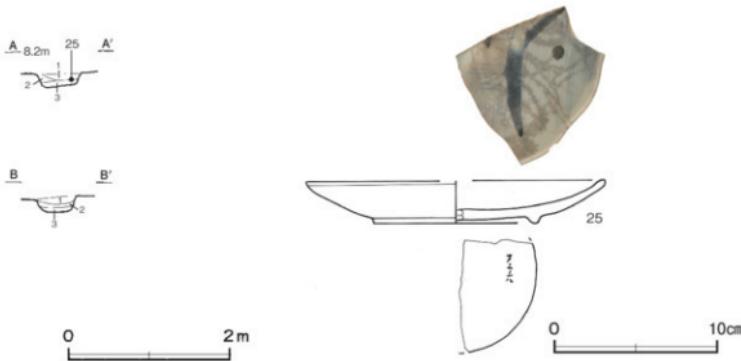
1 黑褐色 焼土粒子少量

3 黑褐色 灰化物多量、黄褐色砂粒微量

2 黄褐色 黄褐色砂粒中量、灰化物・焼土粒子少量

遺物出土状況 土師質土器5点（鉢1、焰口2、不明2）、陶器片7点（小皿1、皿1、鉢1、土瓶1、蓋1、不明2）、磁器片4点（染付碗1、中皿1、不明2）、金属製品1点（不明）、瓦片13点、礫3点が出土している。25は覆土中層から出土した。

所見 時期は、重複関係から19世紀前葉に比定できる。性格は、地境と考えられる。



第15図 第1号溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	刻付・特徴ほか	产地	出土位置	備考
25	磁器	中皿	[184]	27	[100]	緻密 透明釉	灰白	染付 菊花 底部に墨書	不明	覆土中層	10%

#### (4) 整地層

調査A区の西端部とB区の東端部で確認した。部分的に整地されたものと推定できる。以下、遺構と出土した遺物について記載する。なお、A区の整地層実測図は、遺構全体図に掲載する。

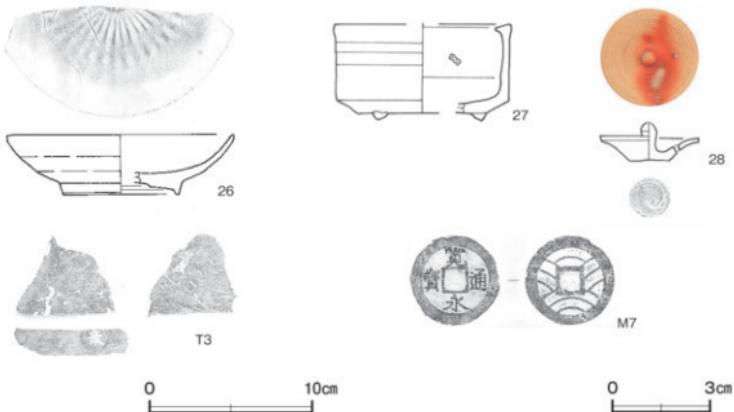
#### A区整地層（第16図）

位置 調査A区のA 1c6～A 1d9区、標高6～8mほどの河岸段丘面上の東西11m、南北9mの範囲で確認した。

埋土 3層に分層できる（基本土層第9～11層に相当）。

遺物出土状況 土師質土器片51点（鉢38、培塿3、不明10）、瓦質土器片1点（不明）、陶器片73点（碗1、小鉢1、鉢1、香炉1、瓶5、仏花瓶1、小水注1、土瓶21、土瓶蓋3、秉燭1、不明37）、磁器片109点（碗66、手塙皿1、皿5、猪口2、小鉢1、鉢1、神酒德利1、瓶1、不明31）、土製品5点（羽口3、さな1、不明1）、石器2点（砥石）、石製品1点（五輪塔地輪）、金属製品22点（釘2、鍋1、鐵滓13、不明鉄製品2、不明銅製品2、不明2）、錢貨3点（寛永通寶1、不明2）、瓦片95点（平瓦1、丸瓦1、不明93）、ガラス片1点、自然遺物6点（貝1、種子2、不明3）が出土している。26～28・M 7・T 3は埋土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物から19世紀前葉に比定できる。本跡を含む水戸街道上には窪地があり、雨水によって通行に支障を来していた。窪地を埋め立てるための整地と考えられる。出土遺物は窪地を埋め立てる際、投棄されたと想定できる。



第 16 図 A 区整地層出土遺物実測図

A 区整地層出土遺物観察表（第 16 図）

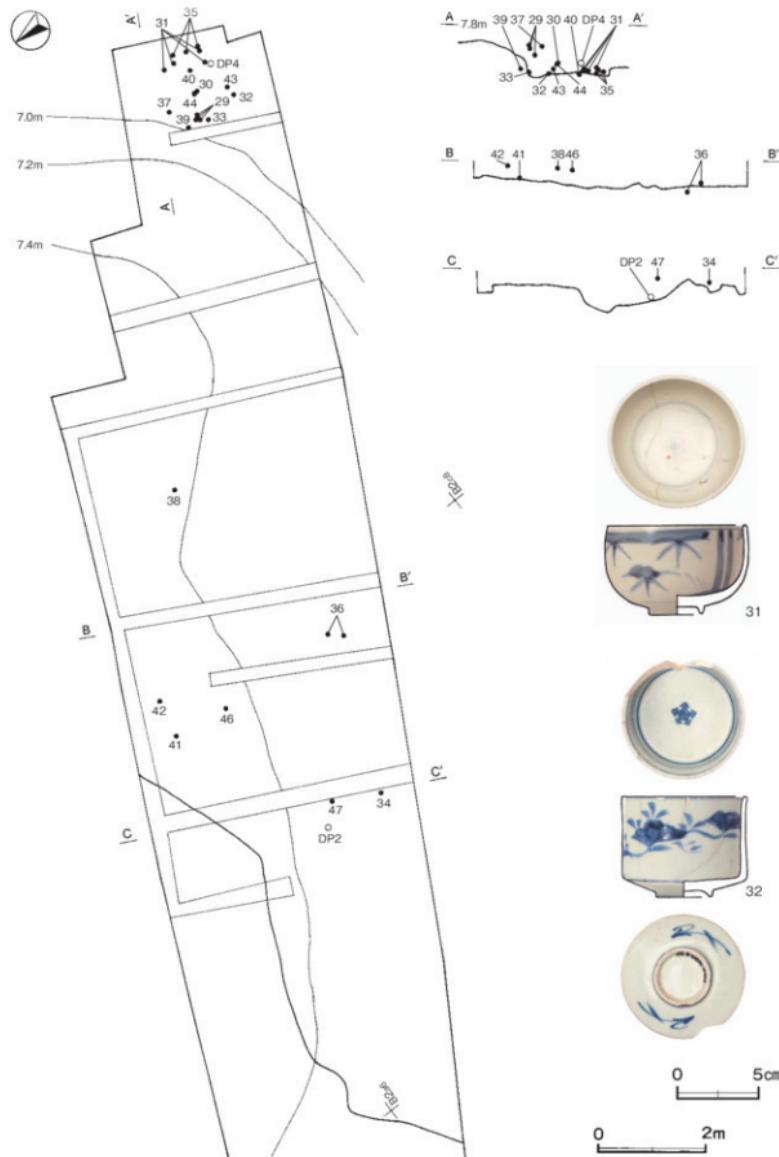
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	給付・特徴ほか	産地	出土位置	備考
26	磁器	手塩皿	[14.0]	37	7.0	織密 透明釉	灰白	菊花型打	肥前	埋土中	40%
27	陶器	香炉	[10.8]	59	[8.0]	長石・鉄鉢	淡黄	半圓形 三足 内面無釉	瀬戸美濃	埋土中	30%
28	陶器	土瓶蓋	61	25	2.5	長石・石英	淡黄	つまみ揉 10 落し蓋 有孔	瀬戸美濃	埋土中	100%
番号	鉢種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鉛年	特徴	出土位置	備考	
M 7	寛永通寶	28	0.6	1.6	5.0	銅	1768 年	四文銭	埋土中	PL 6	
番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	胎土	焼成	特徴	出土位置	備考	
T 3	平瓦	—	(67)	(5.1)	(64.2)	長石	良好	厚さ 18 跡「□」	埋土中		

B 区整地層（第 17 ~ 19 図）

位置 調査 B 区の B 2a5 ~ B 2c0 区、標高 6 ~ 7 m ほどの河岸段丘面上の東西 20m、南北 11 m の範囲で確認した。

埋土 3 層に分層できる（基本土層第 9 ~ 11 層に相当）。

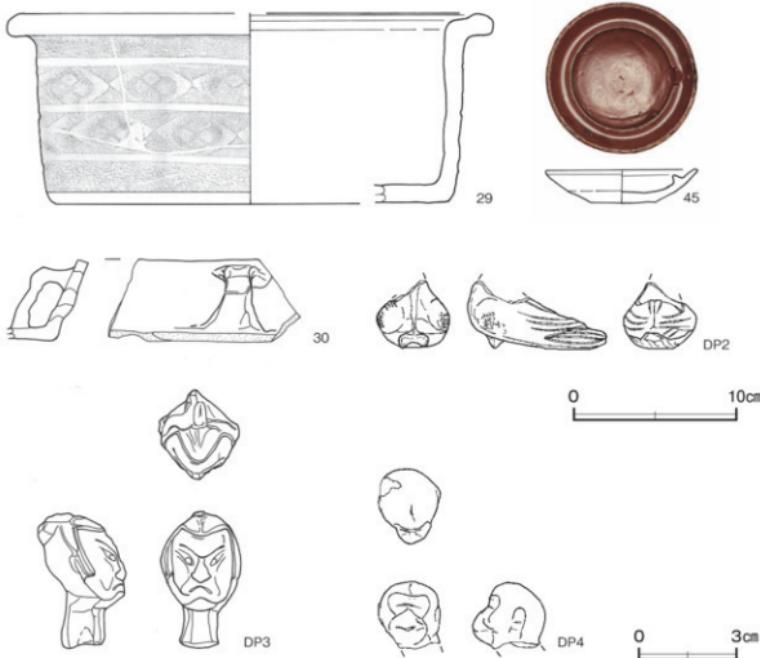
遺物出土状況 土師質土器片 138 点（鉢 42、火鉢 7、七厘 11、壺 3、培烙 39、不明 36）、瓦質土器片 10 点（鉢 4、火鉢 3、植木鉢 1、不明 2）、陶器片 192 点（碗 17、楕小皿 1、皿 9、角皿 1、中鉢 1、鉢 10、片口鉢 6、擂鉢 19、壺 8、瓶 19、土瓶 19、土瓶蓋 1、壺 2、秉燭 2、灯明皿 15、灯明受皿 1、ミニチュア土器 1、不明 60）、磁器片 444 点（小环 7、小碗 4、中碗 4、大碗 1、碗 162、紅猪口 1、仮飯器 1、小皿 2、五寸皿 1、中皿 1、皿 27、手塩皿 3、角皿 3、猪口 1、小鉢 1、中鉢 1、瓶 14、神酒德利 1、燭德利 8、土瓶 3、ミニチュア瓶 1、不明 197）、土製品 32 点（土器片錘 1、竈錘 9、羽口 19、土人形 3）、石器 13 点（輕石 3、砾石 10）、金属製品 44 点（釘 10、鐵滓 19、碗状津 10、煙管 2、不明 3）、錢貨 3 点（寛永通寶）、瓦片 18 点（丸



第17図 B区整地層・出土遺物実測図



第18図 B区整地層出土遺物実測図(1)



第19図 B区整地層出土遺物実測図（2）

瓦1、不明17)、ガラス片1(蓋)、自然遺物5点(貝3、木片1、炭化材1)のほか、縄文土器片1点(深鉢)が出土している。西部から34・42・46・47が埋土上層、36・41・DP2が埋土下層からそれぞれ出土している。中央部から38が埋土上層から出土している。東部から37が埋土上層、29・30・44・DP4が埋土中層、31～33・35・39・40・43が埋土下層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土遺物から19世紀前葉に比定できる。A区整地層と同様に、窪地を埋め立てるための整地と考えられる。出土遺物は窪地を埋め立てる際に、投棄されたと想定できる。

B区整地層出土遺物観察表（第17～19図）

番号	種別	器種	口径	脚高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
29	瓦質土器	桶木跡	[281]	117	[24.4]	長石・石英	にぶい褐色	普通	ロクロナデ 菱縞模様 刷毛印文様	東部・中層	20%
30	土師質土器	始胎	—	50	—	長石・石英	浅黄褐色	普通	有耳 底部平頭 耳が内側から底部に突って付く	東部・中層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	組付・特徴ほか		産地	出土位置	備考
								組付	特徴ほか			
31	磁器	小碗	8.6	5.5	3.2	織密 透明釉	灰白	染付 見込五弁花文	半球形	肥前	東部・下層	100%
32	磁器	小碗	7.7	6.2	3.4	織密 透明釉	灰白	染付 見込五弁花文	筒形	肥前	東部・下層	70%
33	磁器	中碗	[10.0]	5.0	[3.8]	織密 透明釉	灰白	染付 二重輪見込菊花	二重網目文	直立見・平口	東部・下層	50%
34	磁器	紅口	4.4	1.4	1.1	織密 長石釉	灰白	型打 菊花形		瀬戸美濃	西部・上層	100%
35	磁器	五寸頭	13.9	4.0	8.8	織密 透明釉	灰白	染付 唐草文 細の目円形高台		肥前	東部・下層	70%
36	磁器	中皿	14.1	3.3	7.2	織密 透明釉	灰白	染付 見込五弁花文	花舟草文 乾の目輪洞文	肥前	西部・下層	80%
37	磁器	手捲皿	[8.5]	2.0	4.7	織密 長石釉	明暗灰	型紙 型打成形 弯切綱工		肥前	東部・上層	70%
38	磁器	碟口	5.8	3.9	2.7	織密 透明釉	灰白	型紙 よろけ蘆文		直立見	中央部・上層	70%
39	陶器	中鉢	15.8	7.1	6.4	長石・長石釉	灰白	蛇の目釉剥ぎ 丸形		肥前	東部・下層	60%
40	陶器	搖鉢	[19.8]	6.1	[8.0]	長石・鐵釉	浅黄	ロクロ 口縁削薄形 見込瓶目丸に一		瀬戸美濃	東部・下層	30%
41	磁器	抹酒器	1.3	14.4	4.1	織密 長石釉	灰白	染付 桐唐草文 辣堇形		肥前	西部・下層	100% PL 4
42	陶器	秉壺	5.3	(3.1)	4.8	長石・鐵釉	橙	たんころ形 底部輪孔		瀬戸美濃	西部・上層	100% PL 4
43	陶器	秉壺	6.4	4.3	5.0	長石・鐵釉	灰黃	台形たんころ形 底部輪孔 底盤に墨書き「む」。		瀬戸美濃	東部・下層	90% PL 4
44	陶器	灯明鏡	8.0	17	4.3	長石・鐵釉	にぶい褐色	ロクロナデ 底部回転ヘラ削り		瀬戸美濃	東部・中層	100%
45	陶器	印傳文鏡	9.4	2.2	3.8	長石・鐵釉	にぶい赤褐色	油墨切立状		瀬戸美濃	東部・埋土中	100%
46	磁器	瓶	0.6	4.2	1.4	織密 透明釉	灰白	草文 ミニチュア		瀬戸美濃	西部・上層	90%
47	陶器	蓋	2.8	1.1	1.1	長石・鐵釉	橙	つまみ併 0.6 ミニチュア		在地	西部・上層	90%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴		出土位置	備考	
DP 2	土人形	(8.8)	4.6	(4.1)	53.6	長石	鳥 頭部欠損	型押成形	西部・下層		PL 5
DP 3	土人形	4.2	2.5	2.7	147	長石・石英	男 頭部凹	型押成形	東部・埋土中		PL 5
DP 4	土人形	2.1	1.9	2.3	5.6	長石	猿 頭部凹	型押成形	東部・中層		PL 5

## 2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期・性格が不明な礎石建物跡1棟、礎石列1列については、文章で記述し、その他、時期・性格が不明な礎石11か所、土坑17基、ピット群2か所については、実測図と一覧表を掲載する。

### (1) 礎石建物跡

#### 第4号礎石建物跡（第20図）

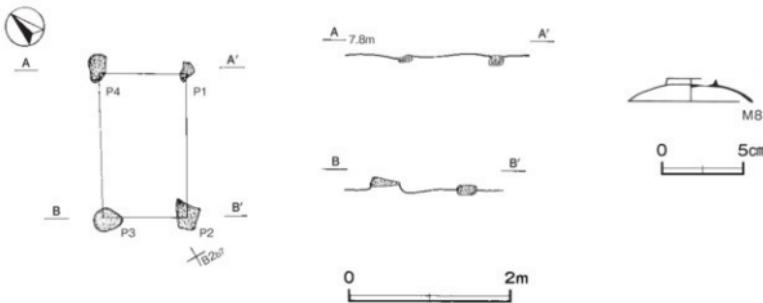
位置 調査B区中央部のB 2a6～B 2a7区、標高7mほどの河岸段丘面上に位置している。

規模と構造 南西半部が調査区域外へ延びているため、桁行は1間で、梁行は1間しか確認できなかった。桁行方向はN-43°-Wである。確認できた規模は、桁行10m(3尺)、梁行18m(6尺)である。

礎石据付穴 4か所（礎石4か所）。平面形は不整長方形または不整楕円形で、長軸（径）26～46cm、短軸（径）18～36cmである。深さ4～14cmで、掘方の断面は浅いU字形である。礎石の平面形は不整長方形または不整楕円形で、長軸（径）20～44cm、短軸（径）15～36cm、厚さ7～14cmである。

遺物出土状況 遺構確認面の出土遺物で本跡に帰属すると思われるものは、金屬製品1点（銅製蓋）、瓦片1点（不明）である。M 8は遺構確認面から出土している。

所見 19世紀前葉に比定できる整地層上面に立地しているので、それ以降の建物と考えられるが、時期・性格は不明である。



第20図 第4号礎石建物跡・出土遺物実測図

第4号礎石建物跡出土遺物観察表（第20図）

番号	部種	口径	断高	底径	重量	材質	等級	出土位置	備考
M8	壺	7.7	14	—	338	銅	良	確認面 PL 6	

#### (2) 磚石列等

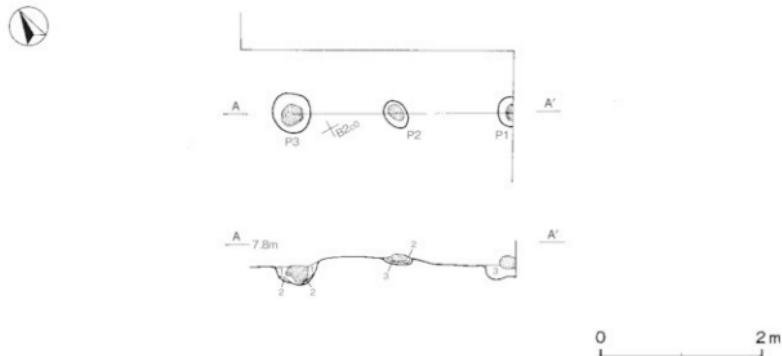
調査中に確認した礎石建物跡について、整理作業の段階で、礎石の配置・間隔・規模、据付穴の埋土や覆土の状態等を検討した。その結果、礎石列1列と礎石11か所として掲載する。

#### 第1号礎石列（第21図）

位置 調査B区東部のB 2b9～B 2e0区、標高7mほどの河岸段丘面上に位置している。

規模と形状 東西方向2.6mの間に礎石3か所を確認した。列方向はN-61°-Wである。柱間寸法は1.3m(4尺)を基調とし、均等に配されている。

礎石据付穴 3か所（礎石3か所）。平面形は円形である。P1・P3は径40～51cm、深さ20cm。掘方の断



第21図 第1号礎石列実測図

面は浅いU字形である。P 2は径26~31cm、深さ6cm、掘方の断面は浅いU字形である。礎石は梢円形または不整梢円形で、長径18~26cm、短径14~21cm、厚さ6~17cmである。第1~3層は礎石の構築土層と考えられる。

#### 土層解説

1 にふい黄褐色 黄褐色砂粒少量

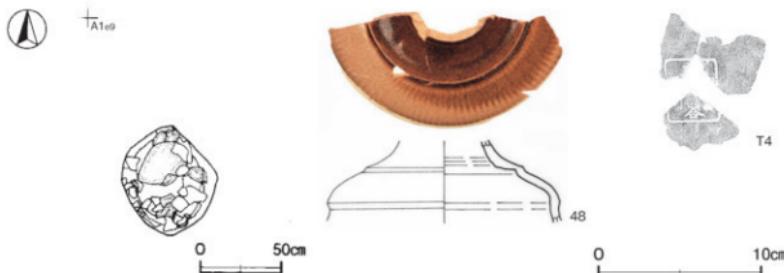
2 にふい黄褐色 黄褐色砂粒中量

3 暗褐色 灰化粒子少量

**遺物出土状況** 陶器片1点(小碗)、瓦片10点、碟3点が据付穴から出土している。遺物は細片のため、図示できなかった。

**所見** 本跡は調査区域南側の水戸街道に平行して配置されている。P 2はP 1・P 3に比べて据付穴の掘方が浅いことから、礎石建物の妻の可能性がある。19世紀前葉に比定できる整地層上面に立地するため、それ以降の施設と考えられるが、時期・性格は不明である。

第1~11号礎石(第22図)



第22図 第11号礎石・出土遺物実測図

第11号礎石出土遺物観察表(第22図)

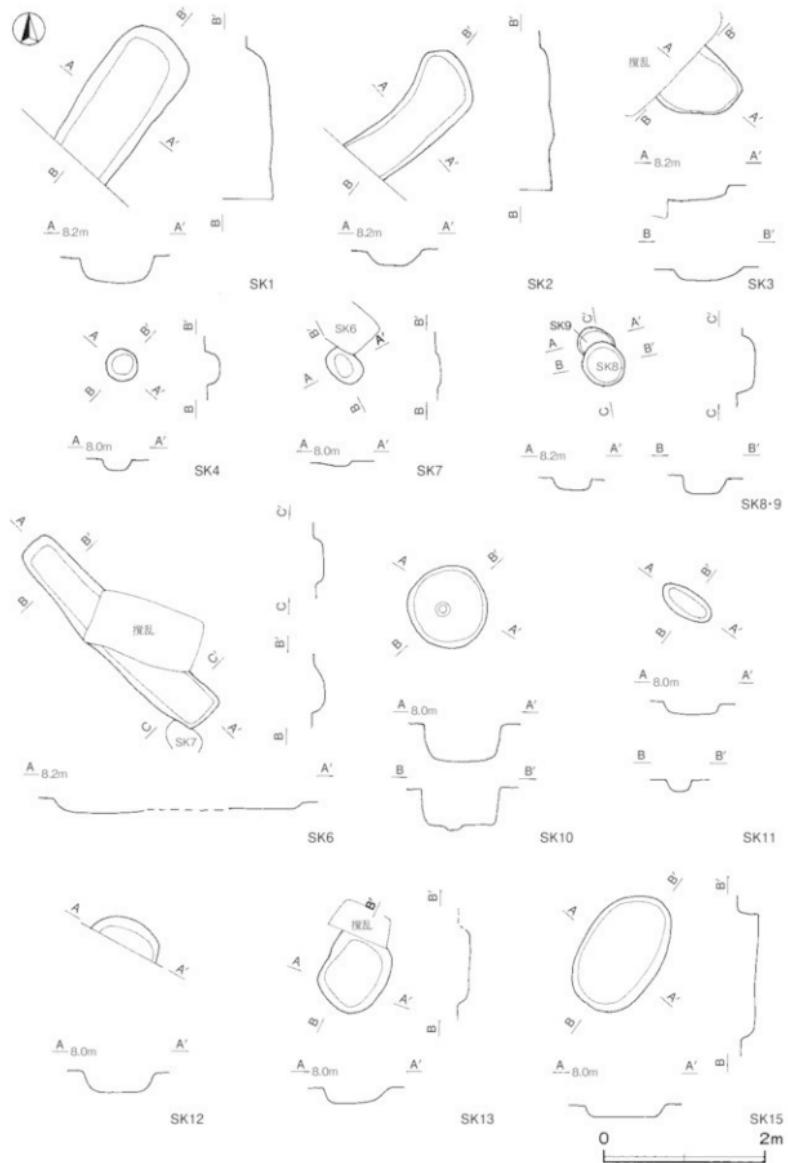
番号	種別	器種	口径	器高	底径	底土・植葉	色調	据付・特徴ほか		産地	出土位置	備考
								縫合	底土			
11	陶器	中瓶	—	(51)	—	縫合	灰褐色	浅黄	飛び面文	鹿児島県	埋土中	10%
T 4	平瓦	—	16.8	(87)	9.85	長石・石英	良好	厚さ1.8	印「□詔合」	—	—	確認済

表4 磂石一覧表

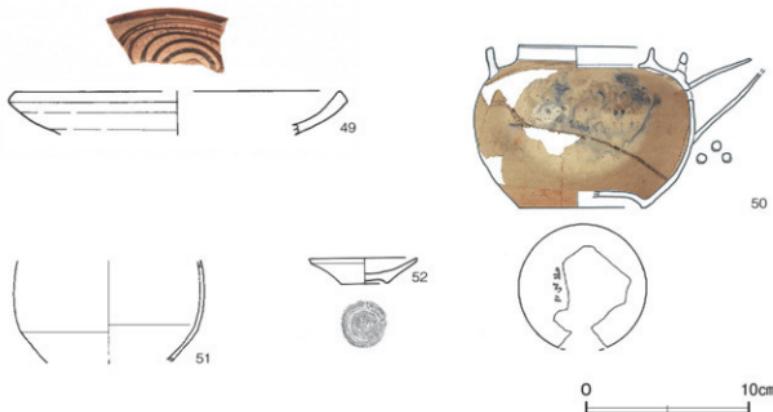
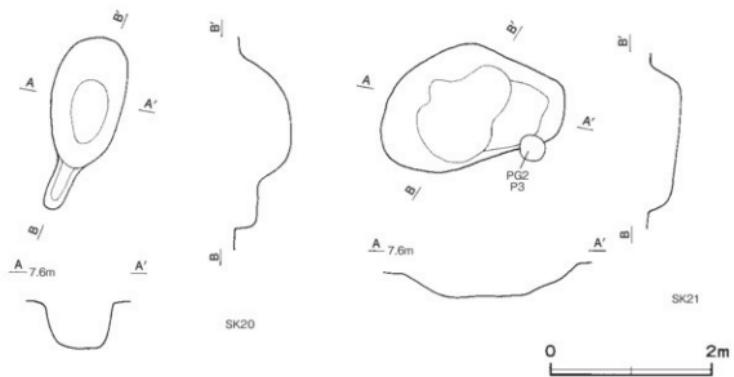
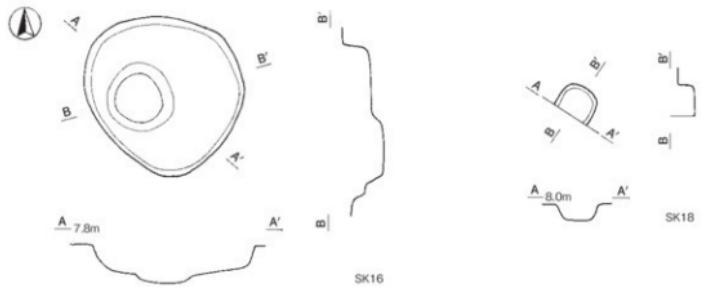
番号	位 置	形 状	規 模 (cm)			番号	位 置	形 状	規 模 (cm)			番号	位 置	形 状	規 模 (cm)		
			長径	短径	厚さ				長径	短径	厚さ				長径	短径	厚さ
1	B 2a9	長方形	20.0	16.0	9.5	5	B 2a8	長方形	28.0	19.0	11.0	9	B 2a7	梢円形	28.0	24.0	10.0
2	B 2a9	不整梢円形	16.0	15.0	9.0	6	B 2a8	長方形	24.0	19.0	8.2	10	B 2a7	不定形	28.0	12.0	12.0
3	B 2a8	長方形	13.0	15.0	8.6	7	B 2a9	不整梢円形	34.0	30.0	10.0	11	A 1a9	不整梢円形	60.0	53.0	12.0
4	B 2a8	梢円形	20.0	25.0	10.2	8	A 1a8	梢円形	36.0	22.0	10.0						

(3) 土坑(第23~25図)

今回の調査で、時期・性格が不明な土坑17基を確認した。これらの土坑の規模や形状等について、実測図、土層解説と一覧表を掲載する。



第23図 その他の土坑実測図



第24図 その他の土坑・出土遺物実測図



第25図 他の土坑出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表（第24・25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	繪付・特徴	产地	出土位置	備考
49	陶器	瓶	[200]	(26)	—	長石 長石釉	灰黄	染付 馬の目瓶	瀬戸美濃	確認済	5%
50	陶器	土瓶	82	99	77	長石 透明釉	灰黄	染付 悪縫 底部に墨書	益子	覆土中層	70%
51	陶器	土瓶	—	(63)	—	長石 長石釉	浅黄	色紙 染付 山水画	益子	覆土下層	20%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考		
M 9	釘	96	0.4	0.3	4.7	鉄	平頭釘	覆土下層	PL 6		

第6号土坑出土遺物観察表（第24・25図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色 調	繪付・特徴ほか	産 地	出土位置	備 考
52	陶器	小皿	66	16	28	長石・石英 瓦片軸	灰黄	ロクロナデ	在地	覆土中	100%
53	陶器	楕卵型	—	(118)	(160)	長石 白釉	淡黄	有足 底部精細 染付色絵	瀬戸美濃	覆土中	30%
54	陶器	大瓶	37	244	105	長石 灰釉	灰白	「高田慈利」形	瀬戸美濃	確認面	80%

第16号土坑出土遺物観察表（第24・25図）

番号	種 別	器種	長さ	幅	高さ	胎土・釉薬	色 調	繪付・特徴ほか	産 地	出土位置	備 考
55	陶器	甕	116	52	47	粗密 透明釉	灰白	型紙 型押成形	瀬戸美濃	覆土中	90%

番号	鉢種	徑	孔幅	厚さ	重量	材質	初跨年	特 徴	出土位置	備 考
M10	文久水賣	27	07	12	36	鋼	1863年	草文広郭	覆土中	PL. 6
M11	文久水賣	27	07	10	26	鋼	1863年	真文漢字手	覆土中	PL. 6
M12	半折縫貯	22	—	14	32	鋼	1873年	明治8年	覆土中	PL. 6
M13	半折縫貯	22	—	13	32	鋼	1873年	明治8年	覆土中	PL. 6

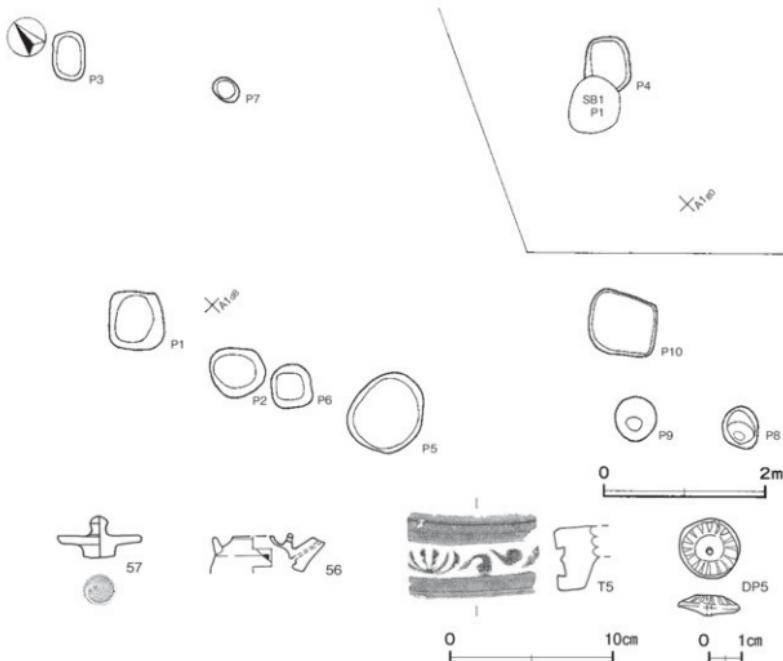
番号	鉢種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
Q2	菲石。	20	21	03	23	黑色粘板岩	扁平	覆土中	

表5 その他の土坑一覧表

番号	位 置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(内→外)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	A 1d7	N-38°-E	【隅丸長方形】	(1.80) × 0.94	33	平坦	板斜	人為	陶器、磁器、金屬製品	
2	A 1e8	N-38°-E	【隅丸長方形】	(1.74) × 0.83	18	平坦	板斜	人為	陶器、磁器、土製品	
3	A 1d7	N-44°-E	【楕円形】	(0.86) × 0.77	17	平坦	板斜	人為	磁器、石器、金屬製品	
4	A 1d9	—	円形	0.40 × 0.38	18	平坦	板斜	人為		
6	A 1f0	N-45°-W	隅丸長方形	3.04 × 0.54	12	平坦	板斜	人為	陶器、磁器、金屬製品	SK7 → 本跡
7	A 1f0	N-48°-W	楕円形	0.49 × 0.36	6	圓状	板斜	自然		本跡 → SK6
8	A 1e9	—	円形	0.54 × 0.50	20	平坦	外傾	人為		SK9 → 本跡
9	A 1e9	N-78°-W	【楕円形】	0.46 × (0.32)	18	平坦	外傾	人為		本跡 → SK8
10	A 1e9	—	円形	1.02 × 0.98	40	平坦	外傾	人為	陶器、磁器、金屬製品	
11	A 2d3	N-57°-W	楕円形	0.70 × 0.32	14	平坦	板斜	人為		
12	A 2d3	N-62°-W	【楕円形】	0.88 × (0.34)	25	平坦	板斜	人為	瓦質土器、繩	
13	A 2d5	N-35°-E	不整椭円形	0.96 × 0.79	19	平坦	板斜	人為	陶器、磁器	
15	B 2a6	N-36°-E	楕円形	1.54 × 1.00	16	平坦	外傾	人為	陶器、磁器、金屬製品	
16	B 2a8	N-50°-W	【楕円形】	2.00 × 1.87	42	平坦	外傾	人為	陶器、磁器、金屬製品	
18	B 2a6	N-35°-E	【隅丸長方形】	0.48 × (0.38)	20	平坦	外傾	人為		SK22 → 本跡
20	B 2a8	N-22°-E	不定形	2.18 × 0.88	52	圓状	外傾	人為	陶器、磁器、繩	
21	B 2a7	N-70°-E	不整椭円形	2.34 × 1.44	32	圓状	板斜	人為	土師質土器、陶器、磁器	

## (4) ピット群(第26・27図)

時期・性格が不明なピット群2か所を確認した。配列が不揃いのため、上屋構造を復元するまでには至らなかった。以下、実測図と一覧表を掲載する。



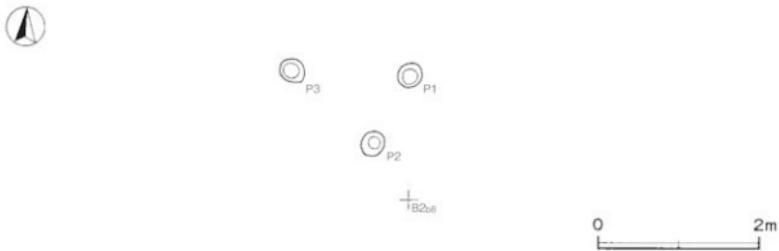
第26図 第1号ピット群・出土遺物実測図

第1号ピット群出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
56	土器	土瓶	[25]	(24)	[7.1]	芸母	橙	普通	一部施釉(長石釉) ミニチュア	P 5 覆土中	20%
57	陶器	釜	54	25	20	長石・鉄釉	橙	つまみ目11	底部斜削系切り	瀬戸美濃	P 6 覆土下層 100%
DP 5	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土			特徴	出土位置	備考
DP 5	鉢	19	18	0.6	1.66	長石			孔径0.1	P10 覆土中	
番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	胎土			特徴	出土位置	備考
T 5	軒丸瓦	(27)	(7.29)	4.4	(111.0)	長石			唐草文	P 4 破壊面	

表6 第1号ピット群ピット計測表

番号	位置	形狀	規格(cm)			番号	位置	形狀	規格(cm)			番号	位置	形狀	規格(cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	A 1c7	楕丸長方形	20	63	15	5	A 1d8	楕円形	100	87	50	8	A 1e8	楕円形	50	44	9
2	A 1d7	楕円形	20	61	6	6	A 1d8	楕丸長方形	53	50	54	9	A 1e8	楕円形	54	30	33
3	A 1c8	楕丸長方形	60	40	30	7	A 1d8	楕円形	34	28	84	10	A 1e8	楕丸長方形	84	74	20
4	A 1d8	楕丸長方形	G7b	56	15												



第27図 第2号ピット群実測図

表7 第2号ピット群ピット計測表

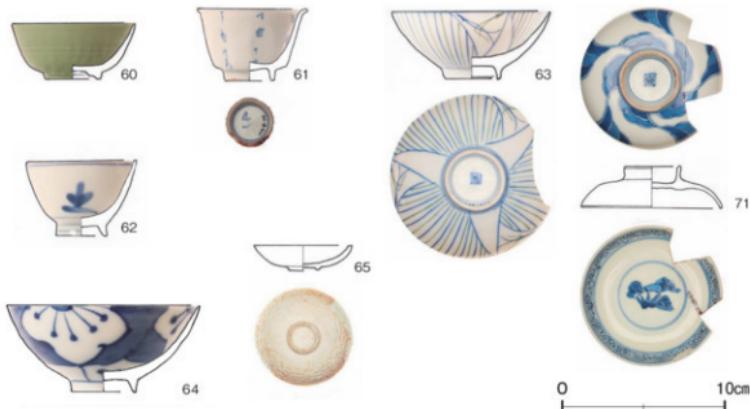
番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	B 2a7	円形	32	30	13	2	B 2a7	円形	30	26	8	3	B 2a7	楕円形	34	30	16

表8 その他のピット群一覧表

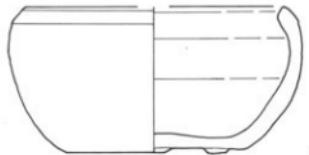
番号	位置	範囲	柱穴数	柱穴形状	径(cm)	深さ(cm)	主な出土品物	備考(調査番号)
1	A 1c7 ~ A 1f0	8 × 14	10	楕丸長方形 楕円形	28 ~ 100	6 ~ 84	陶器、磁器、土製品	SB2・5
2	B 2a7	2 × 2	3	円形 楕円形	26 ~ 34	8 ~ 16		SB4

#### (5) 遺構外出土遺物 (第28~31図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第28図 遺構外出土遺物実測図（1）



58



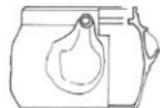
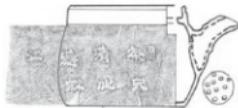
67



68



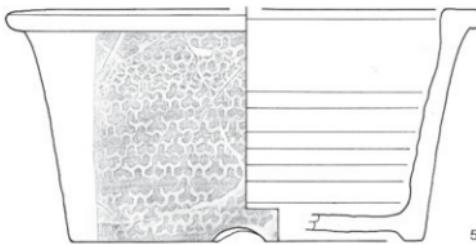
69



72



70



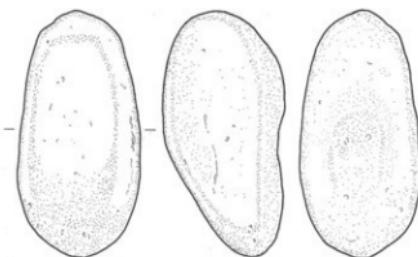
59



73



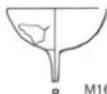
第29図 遺構外出土遺物実測図（2）



Q3



M14



M16



M15

0 10cm



M17



M18



M19



M20



M21



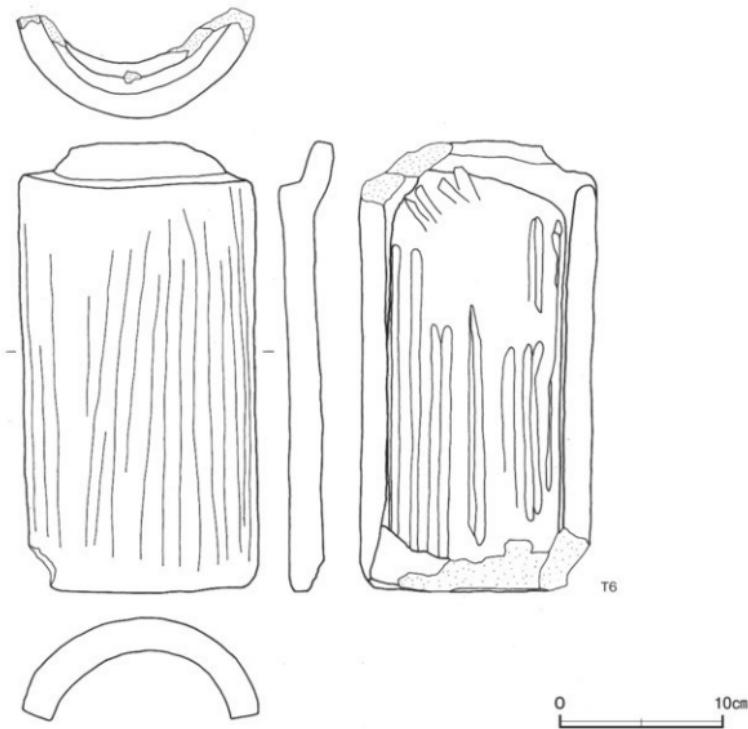
M22



M23

0 3cm

第30図 遺構外出土遺物実測図（3）



第31図 遺構外出土遺物実測図（4）

遺構外出土遺物観察表（第31・32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎・土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
58	瓦質器	火葬	[15.8]	9.0	11.1	長石・雲母	暗灰黄	普通	ロクロ 脚丸形 三足貼付	表土	80% PL 5
59	瓦質器	椎本跡	[29.6]	14.3	[21.6]	長石・赤色粒子	灰	普通	ロクロ成形 跪碌	確認済	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	特徴	地	出土位置	備考
60	磁器	小碗	7.5	3.4	3.3	緻密 青磁釉	灰白	体部下端飛び跑文	肥前	表土	100%
61	磁器	小碗	6.7	4.5	3.0	緻密 透明釉	灰白	染付 毛干形	肥前	表土	90%
62	磁器	小碗	6.7	4.7	3.1	緻密 透明釉	灰白	染付 板文	肥前	表土	80%
63	磁器	小碗	9.8	4.1	3.5	緻密 透明釉	灰白	型紙 折松文 底部に鉢「大寿」	肥前	確認済	80%
64	磁器	中碗	[12.0]	5.3	[4.0]	緻密 透明釉	灰白	染付 梅花文映し	肥前	表土	50%
65	磁器	紅口口	5.3	1.5	1.8	緻密 透明釉	灰白	型押 ハラ割り 細唐草文	瀬戸美濃	確認済	100%
66	陶器	小皿	13.2	3.2	6.7	長石・灰釉	淡黄	二重圓巻文	瀬戸美濃	表土	100%
67	陶器	片口鉢	[18.7]	10.6	8.5	長石・長石釉	灰黄	口縁切込口 丸型 底部に墨書	瀬戸美濃	表土	50% PL 4
68	磁器	津透器	16	6.6	2.7	緻密 透明釉	灰白	染付 五弁花文 端反瓣茎形	瀬戸美濃	表土	100% PL 5

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色 調	繪付・特徴ほか	産 地	出土位置	備 考
69	磁器	昂頭把付	22	17.1	5.8	微密 透明釉	灰白	染付 鉢皆草文 瓶子形 輪高台	肥前	表土	100% PL 4
70	陶器	急須	6.2	6.1	6.5	緻密 鉄釉	に赤い赤茶	押型 布目 横手形	万古	表土	80% PL 5
71	磁器	中頭蓋	8.5	2.6	-	緻密 透明釉	灰白	つまみ付34 手描 緑内渦文 見出付に松	瀬戸美濃	確認面	80%
72	陶器	急頭蓋	5.2	2.2	-	緻密 鉄釉	黒褐	つまみ付13 型押成形	瀬戸美濃	表土	100%
73	陶器	土頭蓋	8.7	4.0	6.0	長石・長石釉	淡黄	つまみ付20 染付 山水文	益子	表土	100%
番号	器種	外径	内径	器高	重量	胎 土		特 徵		出土位置	備 考
DP 6	磁器	[37.0]	[29.1]	3.5	(406.8)	長石・石英・ 雲母	保付着			表土	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質		特 徵		出土位置	備 考
Q 3	磨石	15.2	7.5	7.0	1139.0	安山岩	全面研磨			確認面	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質		特 徵		出土位置	備 考
M14	煙管	(86)	1.0	0.1	(108)	鋼	吸口一枚板で成形			確認面	
番号	器種	口径	器高	底径	重量	材 質		特 徵		出土位置	備 考
M15	鏡	8.8	3.6	-	(77.0)	鋼	底部欠損 体部下端凹み 仏具。			確認面	80% PL 6
M16	漏斗	6.0	4.5	-	(126)	鋼	注口径0.25			確認面	PL 6
番号	鏡種	徑	孔幅	厚さ	重量	材 質	初鑄年	特 徵		出土位置	備 考
M17	淳熙元寶	24	0.6	1.4	3.1	鋼	1174年	背土月		表土	PL 6
M18	寛永通寶	23	0.6	1.3	2.6	鋼	1636年	無背鉢		表土	PL 6
M19	文久永寶	27	0.7	1.4	3.7	鋼	1863年	同母錢		表土	PL 6
M20	文久永寶	27	0.7	1.2	3.8	鋼	1863年	楷書		表土	PL 6
M21	文久永寶	26	0.7	1.0	2.6	鋼	1863年	楷書		確認面	PL 6
M22	文久永寶	26	0.6	1.4	3.3	鋼	1863年	楷書		表土	PL 6
M23	文久永寶	27	0.7	1.3	3.5	鋼	1863年	草文広乳		表土	PL 6
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	地 成	特 徵		出土位置	備 考
T 6	丸瓦	27.6	14.5	2.0	(1679)	長石・石英	良好	燒熱痕 内面ヘラナデ		表土	

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

今回の調査で、江戸時代の礎石建物跡2棟、土坑6基、溝跡1条、整地層2か所と、時期不明の礎石建物跡1棟、礎石列1列、礎石11か所、土坑17基、ピット群2か所を確認した。取手宿跡は、江戸時代以降、利根川の河川改修工事による土砂が堆積した低地に形成された宿場町である。利根川の渡船場から、河川に並行するよう西から東へと延びる水戸街道沿いに約1kmにわたって立地している。この街道沿いに取手宿本陣がある。調査区域は、その東端部に位置する。調査区域の南側には、江戸時代に水戸街道が並行していた。今回の調査で、確認できた遺構と遺物を概観しながら、当時の宿場町の生活の一端に迫ることでまとめとしたい。

### 2 遺構について

19世紀前葉の遺構は、調査A区とB区の整地層2か所、調査A区の第1号溝跡である。整地層2か所の範

間は、調査 A 区の西端部と調査 B 区の東端部で確認した。取手宿本陣であった染野家の資料では、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、利根川増水により堤が決壊したため、堤 200 間の修復が行われたとある<sup>1)</sup>。当時、取手宿において水との共存は大きな課題であった。調査区域西側にある八坂神社の鳥居界が当時の取手宿の東端部であり、その付近から調査 A 区西端部までは大きな窪地があった。当時の記録によると、利根川だけではなく、水戸街道上にある窪地や付近の小河川も、雨水や利根川の増水により、通行できなくなる等の問題があった。水戸街道が水害によって通行できなくなったときは、3 つの廻り道のうち 1 つを用いて、江戸と水戸を往来していたとある<sup>2)</sup>。確認した整地層は、窪地や付近の小河川の往来の不便さを改善したものと考えられる。また、調査区域北側に隣接する念仏院がある台地の斜面部を崩して、整地したという伝承も残っている<sup>3)</sup>。

第 1 号溝跡は、直線状の形状や断面の形状等から地境の溝と考えられる。文化 9～11 年（1812～14）、調査区域北側にある念仏院付近を台宿村と取手村との地境とすることで、両村の住民同士が地境論争を起こしている<sup>4)</sup>。第 1 号溝跡は位置や時期から、地境論争に関連する可能性がある。

19 世紀中葉の遺構は、調査 B 区の第 19・22～24 号土坑である。第 19・22～24 号土坑は、出土遺物から当時の窓穴として利用されたと考えられる。これら土坑は調査区域内でも水戸街道寄りに位置している。

19 世紀後半の遺構は、調査 A 区の第 1・2 号礎石建物跡、第 5・17 号土坑である。第 1・2 号礎石建物跡は、街道沿いに建てられた町屋と推定される。第 2 号礎石建物跡からは、礎石としての玉石が出土している<sup>5)</sup>。第 1 号礎石建物跡から、礎石は出土しなかったが、礎石据付穴から根石として大量の瓦片が出土している。重い上屋構造を支えるため、より強固な基礎工事をしたと推定できることから、旅籠や商家等の二階建ての建物と考えられる。

第 5・17 号土坑は、炭化物や焼土が多い覆土の堆積状況や出土遺物が焼けていること等から火災後の処理土坑と考えられる。第 5 号土坑からは、火熱を受けた神酒利和や寺院で使われる仏花瓶や香炉の仏具、軒丸瓦が出土している。調査区域北側に隣接する念仏院または近隣の寺院が火災に遭い、その処理のための土坑の可能性がある<sup>6)</sup>。記録には残っていないが、19 世紀後半に、取手宿では火災が発生していたと考えられる<sup>7)</sup>。

時期・性格ともに不明な遺構として、第 1・2 号ピット群、第 1～3・6 号土坑がある。第 1・2 号ピット群は、各ピットの掘り込みが浅いことから、建物廃絶時に礎石を撤去した可能性がある。また、第 1～3・6 号土坑も、炭化物や焼土が多い覆土の堆積状況や出土遺物が焼けていること等から火災後の処理土坑という性格が考えられる。

遺構から調査区域が、19 世紀前葉に整地され、文政 7 年（1824）、天保 8 年（1837）、天保 15 年（1843）の大火や記録にない火災等に遭いながらも、取手宿が宿場町として拡張していったことがわかる。

### 3 出土遺物について

当遺跡から出土した江戸時代後期の遺物は図示した 111 点を含め、2,740 点にのぼる。これらの内訳を示したのが表 9 で、在地産土師質土器が 308 点で 15.4%、在地産瓦質土器が 46 点で 2.3%、陶器が 536 点で 26.9%、磁器が 1,106 点で 55.4% である。土師質土器や瓦質土器の出土器種は、焙烙、鉢、擂鉢、火鉢、植木鉢、七厘、甕、竈鶴で、そのうち焙烙、擂鉢、火鉢等の調理具や灯明具が大部分を占めている。陶器や磁器の出土器種は、小环、小碗、中碗、大碗、染付碗、紅猪口、从飯器、極小皿、小皿、五寸皿、中皿、大皿、染付皿、角皿、手塩皿、灯明皿、灯明受け皿、小鉢、中鉢、染付鉢、片口鉢、擂鉢、猪口、香炉、壺、大瓶、神酒利和、燭利和、从花瓶、花瓶、小水注、土瓶、急須、土瓶蓋、急須蓋、中碗蓋、不明蓋、秉燭、戸車、蓮草である。陶器や磁器では、食器具が大部分を占めている。今回は多数出土した磁器に関して、ふれることにする。

表9 取手宿跡出土遺物組成図

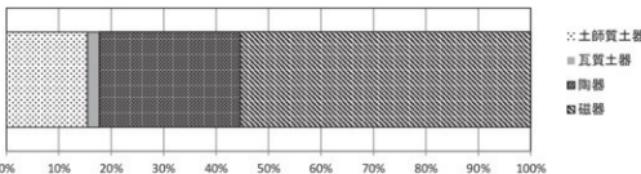
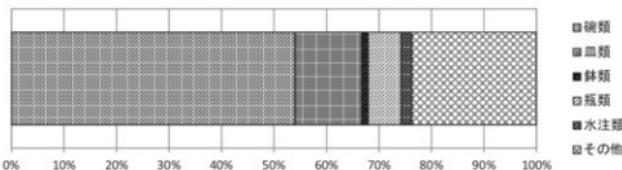


表10 取手宿跡出土磁器器種別組成図



磁器は、出土遺物の2分の1を占めている。これを器種毎の割合で示したのが、表10である。碗類54.1%、皿類12.7%、鉢類13%、甌類6.2%、水注類2.1%である。食膳具である碗類や皿類が約3分の2を占めている。碗類を産地毎でみると肥前系が圧倒的に多い。最も古い段階の碗類は18世紀中葉である。これら18世紀代から19世紀前葉の碗類や皿類等生活雑器は、整地層から出土している。不要となった生活雑器を投棄したと推定できる。磁器は鑑賞用としての希少な物ではなく、生活雑器として、人々の生活中に流通していたと考えられる。

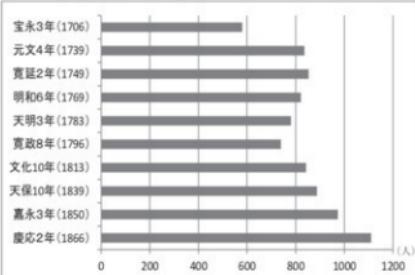
#### 4 おわりに

以上、取手宿跡の構造及び遺物の性格について、若干の考察を加えて述べた。今回の調査は、19世紀代に取手宿が拡張された区域の一部の調査であり、取手宿の全貌を明らかにするまでには至らなかった。しかし、19世紀代に水戸街道を整備することで宿場町が拡張していくこと、記録に残らない火災があったこと、磁器が生活雑器として取手宿の人々の間で使われていたこと等、当時の取手宿の一端を垣間見ることができた。

取手村の人口の推移を示した表11から、19世紀に入ってから、人口が増加に転じている。人口増加の要因としては、水戸街道上の窪地や流作場等居住困難地域を整地することによって、宿場を拡張したことが考えられる。

江戸時代を代表する俳人小林一茶は、文化7年（1810）の夏、取手宿に訪れ「下総の四国巡りや開古鳥」と詠んでいる<sup>8)</sup>。夏の季語「開古鳥」に合わせて、18世紀後半からの新四国相馬靈場という「お遍路」の文化的な活動の中心とな

表11 取手村の人口の推移（「取手村宗門人別改帳」より）



った取手宿へ、人々が集中していた当時の様子を俳句にしている。また、正岡子規は明治22年（1889）の春、水戸への徒歩旅行を記した紀行文『水戸紀行』の中で、「川を渡れば取手とて今頃にては一番繁華なる町なり。処々に西洋風の家をも見受けたり」と、松戸や我孫子等より、取手が繁盛していたことを述べている<sup>9)</sup>。水戸街道の陸運と利根川の水運の交点で生活を豊かにしていった取手宿の歴史解明の一助となれば幸いである。

#### 註

- 1) 取手市史編さん委員会『取手市史 近世資料編Ⅲ』取手市教育委員会 1989年3月
- 2) 取手市史編さん委員会『取手市史 通史編Ⅱ』取手市教育委員会 1992年3月
- 3) 調査区域北側に隣接する念佛院の七代目住職によると、整地されるまで現在の国道付近まで台地の斜面部が続いていたと伝承がある。
- 4) 註1と同じ
- 5) 『取手市史 民家編』によると、江戸・明治・大正期の市内の民家や商家を調査した結果、礎石に利根川や鬼怒川の河原石を玉石として用いたと報告されている。
- 6) 念佛院七代目住職によると、念佛院の過去帳は大正初期からのものしか現存しておらず、念佛院が19世紀後半火災にあったかについて記録は残っていない。
- 7) 『取手市史 通史編Ⅱ』には、19世紀前半までの大火についての記録が残っている。しかし、幕末から明治時代にかけて19世紀後半、市内の大火の記録は残っていない。20世紀に入り、明治39年（1906）に仲町で出火した記録がある。
- 8) 小林一茶『七番日記』岩波書店 2003年11月
- 9) 正岡子規『水戸紀行』『茨城県近代文学選集I 明治の文学』常陽新聞社刊 1977年10月

#### 参考文献

- ・取手市史編さん委員会『取手市史 民家編』取手市役所 1980年10月

写 真 図 版



取手宿跡出土遺物





調査 A 区全景（西側から）



調査 B 区全景（東側から）

PL2



第1号礎石建物跡  
遺物出土状況



第1号礎石建物跡  
完掘状況



第5号土坑  
遺物出土状況

第 5 号 土 坑  
完 挖 状 況



第 17 号 土 坑  
遗 物 出 土 状 況



第 17 号 土 坑  
完 挖 状 況

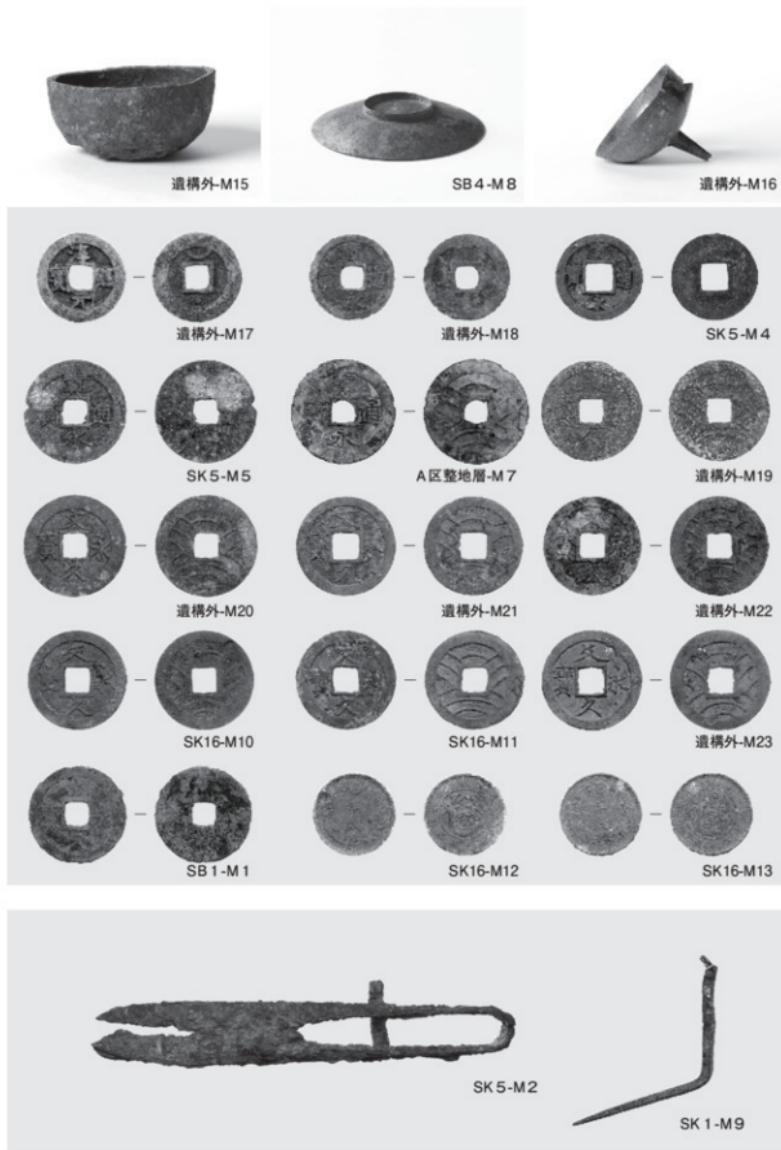




第5·6·17·24号土坑，B区整地層，遺構外出土遺物



第5·17·19·24号土坑，B区整地层，遗构外出土遗物



第1・4号礎石建物跡、第1・5・16号土坑、A区整地層、遺構外出土遺物

## 抄 錄

## 印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 7  
Professional ServicePack1  
編集 Adobe InDesign CS6  
図版作成 Adobe Illustrator CS6  
写真調整 Adobe Photoshop CS6  
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000  
画面類 EPSON ES-G1100  
使用Font OpenType リュウミンPro・L  
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上  
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第385集

## 取 手 宿 跡 1

都市計画道路上新町環状線（東工区）  
街路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成26（2014）年 3月10日 印刷

平成26（2014）年 3月12日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財团

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587  
H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社 あけぼの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1丁目2-11  
TEL 029-227-5505